オリンピック・パラリンピック教育
実践事例集

平成30年9月
東京都教育委員会

目　次

目次

1　重点的に育成すべき５つの資質について
【５つの資質】 ・・ 4
【５つの資質を伸ばすための４つのプロジェクト】 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5

2　オリンピック・パラリンピック教育における重点取組の発達段階別指導内容 ・・・・・・ 6

3　実践事例

ボランティアマインド

武蔵村山市立第七小学校 ・・ 10
渋谷区立広尾中学校 ・・ 12
練馬区立石神井西中学校 ・・・ 14
東京都立志村学園 ・・・ 16

障害者理解

文京区立大塚小学校 ・・ 20
世田谷区立八幡山小学校 ・・・ 22
葛飾区立高砂小学校 ・・ 24
昭島市立玉川小学校 ・・ 26
町田市立南第四小学校 ・・・ 28
国分寺市立第七小学校 ・・・ 30
品川区立鈴ケ森中学校 ・・・ 32
杉並区立大宮中学校 ・・ 34
清瀬市立清瀬第五中学校 ・・・ 36

スポーツ志向

大田区立萩中小学校 ・・ 40
豊島区立富士見台小学校 ・・・ 42
立川市立第五小学校 ・・ 44
東大和市立第五中学校 ・・・ 46
東京都立東大和高等学校 ・・ 48

日本人としての自覚と誇り

小金井市立緑小学校 ・・・

1　重点的に育成すべき５つの資質について

平成 28 年度から、都内全公立学校においてオリンピック・パラリンピック教育推進事業が実施され、各学校で自由な発想による多彩な「４×４の取組」（４つのテーマ：「オリンピック・パラリンピックの精神」「スポーツ」「文化」「環境」、４つのアクション：「学ぶ（知る）」「観る」「する（体験・交流）」「支える」）が展開されています。

この「４×４の取組」の定着を基に、５つの資質の育成に重点を置いた取組を推進しています。

【５つの資質】

１　ボランティアマインド

発達段階に応じてボランティアに関わる取組を継続的・計画的に行い、社会に貢献しようとする意欲や他者を思いやる心を育むとともに、子供たちの自尊心を高めます。

また、障害のある児童・生徒が社会貢献やボランティアに参加できる仕組みを構築します。

２　障害者理解

障害の有無にかかわらず、共に力を合わせて生活できる真の「共生社会」を実現するため、障害者理解の学習・体験や障害者との交流を通じ、多様性を尊重し、障害者を理解する心のバリアフリーを子供たちに浸透させます。

３　スポーツ志向

スポーツへの興味・関心を高め、様々なスポーツを体験することにより、子供たちにフェアプレーやチームワークの精神を身に付けさせるとともに、心身ともに健全な人間へと成長させます。

４　日本人としての自覚と誇り

日本の伝統・文化や最新の技術などを学び、世界に発信する力を育てるとともに、日本人の規範意識や公共の精神等を学ぶことを通じ、子供たちに日本人としての自覚と誇りを身に付けさせます。

５　豊かな国際感覚

世界の多様な国々の歴史や文化を学ぶとともに、留学生や外国人、海外の学校等との交流を促進し、世界各国の人々とコミュニケーションを図ろうとする態度や、豊かな国際感覚を養います。

平成30年度は、この５つの資質の育成と、オリンピック・パラリンピック教育のテーマ「環境」に関する取り組みの充実を図るため、優れた取組を実践した学校のべ154校・園を、オリンピック・パラリンピック教育アワード校として顕彰しました。

指定された学校は、その取組を更に充実させるとともに、成果を広く普及・啓発することにより、オリンピック・パラリンピック教育を一層推進しています。

【５つの資質を伸ばすための４つのプロジェクト】

各学校においては、前述の５つの資質を伸ばすために、以下の４つのプロジェクトを活用することにより、日常的に行っている独自の取組を更に活性化させていくことが大切です。

１　東京ユースボランティア（Tokyo Youth Volunteer）

子供たちのボランティアマインドを育むとともに、自尊感情を高めていくために、発達段階に応じて、ボランティア活動を計画的・継続的に行います。

２　スマイルプロジェクト（Smile Project）

子供たちに、お互いの人格や個性についての理解を深め、自ら主体的に関わる方法を考えさせ、思いやりの心を育成する取組や、障害の有無にかかわらず、相互理解を図る教育を充実・拡大します。

３　夢・未来プロジェクト（Dream/Future Project）

オリンピアンやパラリンピアン等のアスリート等を学校に派遣し、直接交流することにより、児童・生徒がオリンピック・パラリンピックのすばらしさを実感できるようにするとともに、スポーツへの関心を高め、夢に向かって努力したり、困難を克服しようとしたりする意欲を培います。

４　世界ともだちプロジェクト（ Global Friendship Project ）

様々な人種や言語、文化、歴史などを学ぶことを通して、世界の多様性を知り、様々な価値観を尊重することの重要性を理解するために、大会参加予定国を幅広く学び、可能な限り実際の交流へと深化する活動を行います。この際、これまで地域・学校が築いてきた姉妹都市や姉妹校等のつながりも生かした教育を展開します。

また、留学生が多く、多様な国籍の人々が住み、大使館が集中している等の東京の特性を生かした国際交流も実施します。

２　オリンピック・パラリンピック教育における重点取組の発達段階別指導内容

１　ボランティアマインド

	小学校１～３年生	小学校４～６年生	中学生	高校生
ねらい	「身近な人に思いやりをもって接しようとする」	「周りの人に思いやりをもって役割を果たそうとする」	「地域に貢献しようという気持ちをもち、自分にできることに取り組む」	「社会貢献の意識をもちボランティアに参加する」
取組例	・道徳「親切・思いやり」についての学習 ・幼稚園、保育園等との交流 ・「あいさつ運動」への参加	・道徳「勤労、公共の精神」「親切・思いやり」についての学習 ・地域清掃への参加 ・「あいさつ運動」の参加	・道徳「社会参画、公共の精神」についての学習 ・地域清掃、地域防災訓練の参加 ・職場体験との連携 ・スポーツ大会等へのボランティア参加 ・地域の夏祭りの運営に参加	・学校設定教科・科目「人間と社会」におけるボランティアについての学習 ・防災訓練の参加 ・スポーツ大会等へのボランティア活動の参加

２　障害者理解

	小学校１～３年生	小学校４～６年生	中学生	高校生
ねらい	「障害がある人や高齢者とふれ合う」	「体験を通して、障害について理解する」	「障害について理解し、障害がある人と交流する」	「障害がある人に対して思いやりをもって行動できるようにする」
取組例	・道徳「思いやり」について学習 ・障害者スポーツ体験 ・高齢者とのふれ合い	・総合「手話、点字」の体験 ・障害者スポーツ体験 ・車いす、白杖体験 ・障害のある方との交流 ・特別支援学校との交流	・パラリンピアンを招へいしての講演会 ・障害者スポーツ体験 ・特別支援学校との交流	・障害者スポーツ体験 ・障害者スポーツ大会の運営ボランティア

３　スポーツ志向

	小学校１～３年生	小学校４～６年生	中学生	高校生
ねらい	「スポーツに親しむ」	「多様なスポーツに触れる」	「スポーツの意義や多様な関わり方を知る」	「自分にあったスポーツとの関わり方を見つけ、生涯にわたって関わろうとする」
取組例	・オリンピアン、パラリンピアンとの直接交流を通して競技を直接観る。 ・休み時間を活用した運動	・オリンピアン、パラリンピアンとの直接交流を通して競技を直接観る。 ・大会運営等、スポーツとの多様な関わり方を取り入れた体育授業	・保健体育「運動やスポーツの役割」について学習 ・アスリートから直接指導を受ける。 ・オリンピック、パラリンピック競技種目を実際に体験 ・小学生とのスポーツ交流	・保健体育「スポーツへの関わり方」の学習 ・外部から講師を招へいしたトレーニングの実施 ・アスリートからの技術指導 ・中学生とのスポーツ交流

４　日本人としての自覚と誇り

	小学校１～３年生	小学校４～６年生	中学生	高校生
ねらい	「地域の良さを知る」	「日本のよさを知る」	「日本のよさを学び、外国人に伝える」	「日本のよさを深く理解し、多様な方法で外国人に伝える」
取組例	・社会「地域の特産品」について学習 ・伝承遊び	・図画工作等で和紋様の手ぬぐいの作成方法を学ぶ ・茶道など日本の文化に親しむ ・音楽で和楽器を使った演奏会を鑑賞	・伝統的な礼儀作法等の日本の文化を英語で外国人に紹介 ・家庭の調理実習でだしを理解したり、和服の着方の学習	・体育で武道の履修 ・スピーチコンテストで日本の伝統・文化のテーマを設定

５　豊かな国際感覚

	小学校１～３年生	小学校４～６年生	中学生	高校生
ねらい	「世界の国々について知る」	「世界の国々について調べる」	「外国の人と交流を体験する」	「主体的に外国の人と交流する態度を育てる」
取組例	・図画工作「万国旗」を作成 ・世界の料理の給食	・世界の国々の文化等の調べ学習 ・世界の言葉であいさつ ・世界の料理の給食	・大使館職員や留学生を招へいしての講演会 ・修学旅行等での外国人インタビュー ・世界の料理の給食	・海外修学旅行、語学研修等の取組 ・海外の学校との交流 ・第二外国語の学習

実践事例

ボランティアマインド

＜実践事例　武蔵村山市立第七小学校＞

1. 取組・活動名

「地域との連携　～おもてなしの心を育てる～」

2. 取組・活動のねらい

○ボランティアマインドを醸成し、おもてなしの心を育成する。
○体験的な活動を通して他者を思いやる心を育成し、自尊感情や社会貢献への意欲を高める。
○東京2020大会に向けて、異文化理解の心を育成する。

3. 教育課程上の教科名・時数

「総合的な学習の時間、学校行事・20時間」

4. 実施上の工夫

・地域の保育園との連携を密に図り、園児と触れ合う中でお世話をする楽しさや達成感を感じられるように配慮し、児童の学習に対する意欲を引き出した。
・交流活動を盛んに取り入れ、児童が体験的に学習できる活動の時間を確保した。
・本活動以外でも、様々な学習活動・特別活動で上級生は下級生に対して「おもいやりの心」を、下級生は上級生に対して「あこがれの心」を日常的に意識させた。
・交流活動の際には、保護者や地域にも協力を呼び掛け、多くの目で児童の活動をサポートする体制を作った。

5. 本取組・活動の内容

「おもてなし講座」

・5・6年生を対象に、地域にお住まいの元キャビンアテンダントの方をお招きし、おもてなしをする際の心構えを学んだ。
・何人かの児童が実際に前に出て、お辞儀の仕方を体験したり、キャビンアテンダントの方がどのようなことに気を付けているのかを聞いたりして、初めて知ることに驚きがたくさんだった。

「ミニ先生」

・総合的な学習の時間を使い、五年生たちがお世話になった保育園に行き、園児たちと交流した。
・園に行くだけではなく、園児を学校に招待し、小学校の授業を見学したり、5年生が先生役となって本当の教室で国語や算数の授業をしたりした。
・小さな子に対して、どのように接したら良いか、考えながら活動した。

「大連との交流」

・中国の大連から来た小学生 12 人を、6年生がおもてなしをした。
・ネームカードを作ったり、中国語の挨拶を覚えたりして本番に臨み、当日は、一緒に跳び箱をしたり音楽の授業で一緒に歌ったりして楽しみながら交流を実施した。
・掃除の時間では、学校での掃除の文化があまりない大連の小学生に、掃除のやり方を教える6年生の姿が見られた。

6. 成果

・児童一人一人が相手意識をもち、細やかな心配りや相手の気持ちを考えて交流することの大切さを知ることができた。
・文化の差に戸惑いを感じながらも、相手を楽しませたいという気持ちから、自ら相手の国の言語やボディランゲージでコミュニケーションをとろうとする姿勢が育った。
・多くの交流活動を通して、児童が実際におもてなしの心を発揮する活動をすることができた。
・校内において、上級生から下級生への思いやりの心が育ち、縦割り班活動や休み時間に、下級生のお世話をする場面が増えた。

＜実践事例　渋谷区立広尾中学校＞

1. 取組・活動名

「広尾中・氷川地区合同防災訓練」

2. 取組・活動のねらい

○初期消火や応急救護の対応方法、また、避難所開設時での取組内容や地域の方々との協力事項を体験することで、地域の一員としての自覚を養う
○災害用トイレ設置、避難所ボード組立、初期消火訓練、D級ポンプ訓練、炊き出し（器具説明、備蓄品配布）、過去の災害（DVD）の視聴など、様々な訓練を継続（3年間）して実施することで、対応方法を身に付ける。

3. 教育課程上の教科名・時数

「総合的な学習の時間・3時間」

4. 実施上の工夫

・本校生徒の縦割り班に地域の方々が分かれて入り10名程度の班を編成し、全員が体験活動を行えるようにした。
・3年間をかけて繰り返し体験を重ねていけるようにしている。生徒には、「実際に災害が起こった時に行動できる生徒を目指している」ことを説明したうえで実施するようにし、目的意識をもって取り組むようにした。
・数回体験した教員も、関係諸機関の指導者とともに指導し、教員も地域の方々と避難所を運営していくという意識を高めるようにした。

5. 本取組・活動の内容

「D 級ポンプ訓練」
【1 指導者】
消防署員
【2 実施内容】
・初期消火の目的や留意事項の説明
・D 級ポンプの操作方法
・消防署員による模範演技
・二人一組での体験活動
・学校周辺の取水管の位置確認と器具設置方法の説明等

「応急救護訓練」

【1 指導者】
日赤看護大学職員
【2 実施内容】
・応急救護の目的や留意事項の説明
・三角巾の使用方法説明と二人一組での体験活動
・心臓マッサージ、人工呼吸の実施方法の説明
・一人で行う場合、二人で行う場合の実践

「避難所開設後訓練」

【1 指導者】
防災課職員
【2 実施内容】
・避難所開設時に行うことの説明
・災害に関する DVD を視聴し、過去の災害から避難所が行う役割について学ぶ
・災害用トイレの設置、間仕切りの組み立て体験、炊き出し訓練の実施方法の説明
・学校内にある防災倉庫の見学等

6. 成果

・指導員からだけではなく、すでに体験している上級生から実施内容の補足説明があったり、実施内容のアドバイスがあったりする班もあり、継続した指導の成果が見られた。
・地域の方々を含めた班編成をすることで、生徒と地域の方々とで、できることの分担をして実施するという体験ができた。
・月に一度実施している避難訓練の、次の段階の訓練を体験することができ、災害発生から避難所運営までの流れを理解することができた。また、避難所の役割や協力して行っていかなければならないことが、体験をしながら理解できた。

＜実践事例　練馬区立石神井西中学校＞

1. 取組・活動名

①「服のチカラプロジェクト」（ボランティアマインド）
②「和菓子作りと菊の栽培」（日本人としての自覚と誇り）

2. 取組・活動のねらい

①・活動母体の民間企業社員の出前授業を通して国際問題に目を向けさせ、一人一人が出来ることを考えさせる。
・子供服の回収活動を通して、社会貢献の精神を育む。
②・日本の文化である和菓子作りを体験することで日本の食文化に目を向けさせる。
・JET 青年とともに和菓子作りを体験することで、日本の文化を外国人へ発信する力を培う。

3. 教育課程上の教科名・時数

①「特別活動（委員会活動）・1時間」
②「技術・6時間」「総合的な学習の時間・1時間」

4. 実施上の工夫

①・JRC 委員会生徒を対象に活動母体の民間企業社員による出前授業を実施し、服にはどのようなチカラがあるのか、回収した服はどのように役立てられるのか学習した。
・出前授業で学んだことをもとにポスター・チラシを作り各家庭に配布した。服の回収ボックスは、目立つようなデザインにし、生徒が楽しんで参加できるようにした。
②・開校70周年式典に合わせて菊の栽培を行い、式典当日に生徒が作った花鉢で校内を装飾した。
・和菓子職人をゲストティーチャーとして招へいし、生徒が育てた大菊をモチーフとした和菓子作り体験を行った。

5. 本取組・活動の内容

「服のチカラプロジェクト　民間企業社員による出前授業」

・JRC 委員会では、民間企業が社会貢献活動として行っている『“届けよう、服のチカラ”プロジェクト』に参加した。これはいらなくなった子供服を回収し、企業を通じて難民キャンプなど子供服を必要としているところに贈る活動である。
・この活動のスタートにあたり、放課後に JRC 委員と有志生徒が集まり、来校した講師の方から「難民問題」と「服のチカラ」について特別授業を受けた。
・この取組は、スクールアクション「もったいない」大作戦の取り組みの一つとして行った。

「服のチカラプロジェクト　回収活動の様子」

・いらなくなった子供服を、難民キャンプで暮らす世界の子供たちに贈るため、平成 29 年 10 月 2 日（月）～ 31 日（火）の期間に JRC 委員会が中心になり回収活動を行った。
・2カ所ある生徒の昇降口に段ボール箱を設置した。JRC 委員会とボランティアの生徒で、回収した服を仕分けしてダンボールに詰めたところ、大きなダンボール箱4箱がいっぱいになった。
・後日、企業の方が難民キャンプで服を配る様子や、その服を着て喜ぶ子供や親たちの様子を写した写真を全校朝礼でスクリーンを使って紹介した。

「和菓子作りと菊の栽培」

・2020 年東京オリンピック・パラリンピックに向けて、日本の伝統文化を海外に発信できる生徒の育成する事業のひとつとして、1 年生の授業で和菓子作り体験を行った。
・和菓子は自然の美しさや季節の移ろいを表現し愉しむもので、年中行事、人生の節目、家族や地域との密接な関わりの中で食されることを生徒は理解した。
・実習では演示を行う先生の手順・動作をよく観察して自分の作品を創作した。今回作った練りきり製の「玉菊」は、1 年生が 11 月に行われた 70 周年記念式典に向けて栽培した菊をイメージしている。

6. 成果

・生徒のボランティアマインドの醸成に向けて立ち上げた JRC（青少年赤十字）委員会を中心に、国際社会への貢献やボランティア活動に関する掲示や発表を通して、全校生徒に周知した。また、外部講師を招へいした授業や、首相官邸・JICA 施設訪問などを通し、多くの生徒が奉仕や社会貢献について関心をもつようになった。
・JRC 委員会を中心として、生徒の手によるボランティア活動の推進を日常的に行ったことで、全校の生徒が自分が出来る社会貢献について考え、自主的に募金や支援活動に協力するようになった。
・日本の秋を象徴する花である菊の栽培を通して植物を慈しむ心が育っていった。夏の間、欠かさず水を遣り、70 周年記念式典に合わせて大きな花を咲かせることができた。
・日本の伝統文化の良さ理解し、外国人に発信する力の育成事業の一貫として、切り絵、茶道、着付け、落語鑑賞、和菓子作り、弓道などに取り組んだ。また、ALT や JET 青年とともに授業を受け、英語を使って日本の文化を話題に交流する体験を積むこともできた。

＜実践事例　東京都立志村学園＞

1. 取組・活動名

「おもてなしの心」を育む

2. 取組・活動のねらい

○ 本校では、社会自立・社会貢献を目指し、生徒全員の企業就労を実現するための専門的な教育を推進している。また、社会の一員としての自覚を育て、地域社会に貢献しようとする意欲や態度を養うことを教育目標の一つとし、職業に関する教科を中心に企業就労に必要な幅広い知識や技術を身に付けさせている。

○ 食品加工コースが営業するカフェでは、地域住民や高齢者、外国からのお客様等を招いた接客をとおして「おもてなしの心」を育み、ボランティアマインドの醸成を図っている。

3. 教育課程上の教科名・時数

「職業に関する教科・5時間」他

4. 実施上の工夫

・「食品加工コース」が運営するカフェ・レストラン「café de NOVICE」は、月1回のレストラン営業、週1回のカフェ営業を行い地域の皆様に利用していただいている。
・月1回高齢者施設の利用者の皆様を本校に招き、「介護・コミュニケーションコース」が企画したレクリエーションを介護実習室で楽しんでもらうようにしている。
・「ビルメンテナンスコース」が通路やカフェの床清掃、ガラス清掃等を担当し、「流通・都市農園芸サービスコース」がカフェ・レストラン前や通路上の花壇の整備、プランターの手入れを担う等、全コースで関わり、お客様を迎える準備をしている。
・外国人が訪問する際には、ウェルカムボードの作成等に取り組んでいる。

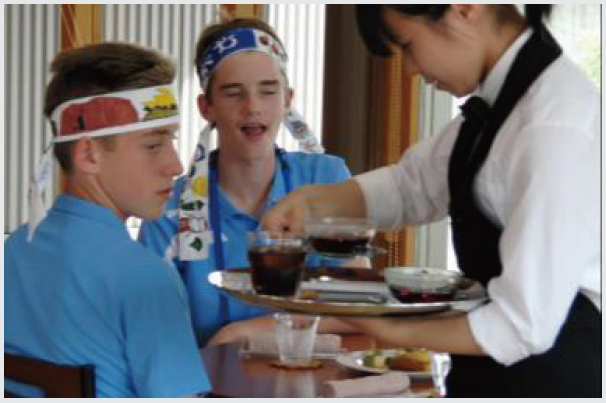
5. 本取組・活動の内容

「高齢者へのおもてなし」

・高齢の方や車椅子を使用している方が来店されると、「食品加工コース」の授業で学んだ接客、「介護・コミュニケーションコース」で学んだ車椅子の操作や話し方等を生かしてもてなしている。
・接客を担当する生徒たちは少し緊張しながらも、タイミングを見極め、生徒同士連携しベストを尽くして対応している。
・お客様から「お肉、やわらかくておいしかったね」といった楽しそうな会話が聞こえ、「親切ですね」、「ありがとう」という言葉を掛けていただき、生徒の表情も笑顔に変わり達成感を感じている様子が伺えた。

「レストラン営業でのおもてなし」

・レストラン営業時は季節に応じたランチメニューを提供している。12 月にはクリスマスメニューとして赤ワインを使って調理したフィレ肉の料理や、ノンアルコールのシャンパンを提供し、お客様をもてなしている。
・また、サービス担当は胸に生花のコサージュを付けて、店内の装飾やBGMにも工夫を凝らしている。
・生徒たちは、レストラン営業をとおして、お客様を第一に考えたおもてなしができることを目標に学んだ技能やサービスを発揮している。



「外国からのお客様をもてなす」

・東京国際ユース（U-14）サッカー大会に参加するために海外のチームが2年連続で本校を訪問した。
・就業技術科美術部の生徒がウェルカムボードとハチマキを作成し、代表の生徒が英語で出迎えた。
・カフェにてティータイムを取った選手たちは、その後、バスケットボールやバレーボールを使用した運動や長縄等のスポーツで交流し、相互に理解を深めた。

6. 成果

・接客だけではなく、調理、清掃、花壇の整備、車いすの操作、コミュニケーション等をとおして、生徒がそれぞれの役割を発揮している。
・お客様をもてなし、お客様に喜ばれる経験、感謝される経験を積み重ねることにより、自己有用感が高まり、社会に貢献しようとする意欲や他者を思いやる心を育むことができている。本校の生徒たちの目標である企業就労に向け、就労意欲の向上につながっている。

介護実習室でのレクリエーション

流通・都市農園芸コースが整備した寄せ植え

ビルメンテナンスコースによる清掃

実践事例

障害者理解

＜実践事例　文京区立大塚小学校＞

1. 取組・活動名

「障害者理解の促進　～みんな大切・みんな幸せ～」

2. 取組・活動のねらい

障害者との交流や車椅子体験など、児童が実際に体験することで、障害について理解を深める。
○パラリンピアンとの交流を通し、パラリンピックについて理解を深める。
○障害者を支える人たちの仕事や考え方にふれることで、互いを尊重する共生社会を探究する。

3. 教育課程上の教科名・時数

「総合的な学習の時間ほか・10時間程度」

4. 実施上の工夫

・学校地域支援本部の方にコーディネートをしていただき、オリンピアン・パラリンピアンを中心に積極的に外部講師を活用した。
・障害のある方とのふれ合いを通して学ぶ機会を多く設けることで、共生社会の実現に向けて自分ができることについて考えさせた。
・外部講師を招く際には、講演だけでなく給食や遊びなどを一緒に行うことを通して、障害について理解を深め、相手意識をもったコミュニケーションが図れるようにした。

5. 本取組・活動の内容

「パラリンピアンとかけっこ教室」
・リオパラリンピック・走り幅跳び金メダリストの講師を招き、全校講演会の後、3・4年生を対象にトレーニングを体験したり一緒に競争したりする特別授業を行った。
・特別授業後は教室に選手を招いて、和食や民舞などの日本文化を紹介しながら給食交流会をした。

「障害者との交流や障害の体験」

・ブラインドサッカー体験（3～6年生）
・補助犬協会主催「ほじょ犬セミナー」（1・2年）
・日本視覚障害者柔道連盟主催、リオパラリンピック・視覚障害者柔道銀メダリスト講師による視覚障害者柔道体験（3・6年）などを実施した。

「パラリンピアン交流授業」

・ 夏季冬季の両方のパラリンピックに出場した講師を招き、全校講演会を開催した。
・ その後、5・6年生を対象に走り方やトレーニング方法について、特別授業を行った

6. 成果

・一昨年度から、10名以上のオリンピアン・パラリンピアンを講師として招へいした。特に、パラリンピアンとの交流を通して、障害をハンディキャップと感じずに夢を追いかける心の強さや努力する姿勢について学んだ。
・パラリンピアンとの交流以外の体験活動を中心とした特別授業を数多く開催することにより、障害者理解の促進や共生社会の実現に向けた意欲の向上につながった。
・障害や障害者について、マイナスイメージを抱いていた児童も、ふれあいなどを通して、自分たちと変わらないのだという心情の変化があり、地域で困っている障害者に声をかけるようにしていきたいなど、自分から関わり方を工夫しようとする姿勢が見られた。

＜実践事例　世田谷区立八幡山小学校＞

1. 取組・活動名

「パラリンピック特別授業　～パラリンピアンがやってくる～」

2. 取組・活動のねらい

○パラリンピック競技大会に出場し、メダルを獲得するに至るまでの経緯や経験談を伺う中で、何事も諦めずに努力を続けることの大切さを知る。
○パラリンピアンの実演や共演することを通して、スポーツの魅力や楽しさを実感し、自らすすんで運動に親しもうとする意識を高める。
○パラリンピアンとの交流から、障害や障害者スポーツについて理解を深め、障害者に対する心のバリアフリーを醸成する。

3. 教育課程上の教科名・時数

「特別活動・2時間」

4. 実施上の工夫

・授業実施1ヶ月前から、オリンピアンが活躍している写真をパネルに貼って校内に掲示し、オリンピアンへの興味・関心を高めていく。
・本校の運動会で使用している聖火台を活用し、パラリンピックの雰囲気を演出する。
・全校児童の前で、各学年代表児童とパラリンピアンが50mを共に走り、パラアスリートの身体能力の高さを実感させる。
・パラリンピアンの講演や交流を通して、パラリンピック競技のルールや用具などの違い、競技を楽しむためのさまざまな創意工夫について、理解を深めていく。

5. 本取組・活動の内容

「パラリンピアンの講演」

・体育館の舞台に聖火台を設置して、パラリンピックの会場の雰囲気を演出し、パラリンピアンを迎えた。
・「万事全力」というテーマで、自分の障害についても触れ、陸上競技との出合いや、どんな時でも諦めない気持ちで取り組むことの大切さについて講演していただいた。

「代表児童との50m走の共演」

・全校児童が見守る中、各学年代表児童と共に走り、パラリンピアンが児童より10m後方からスタートしたが、颯爽と抜き去りゴールする姿を見た児童から、大きな歓声が上がった。
・共に走った児童から「あともう少しだったのに。」と悔しがる姿や「フォームがきれいだった。」との声があがり、アスリートのすごさを実感していた。

「パラリンピアンとの交流」

・授業終了後、パラリンピアンは児童一人一人とお別れの握手をした。人との出会いを大切にする人柄に触れることができた。
・獲得された本物の銅メダルに触れ、その重みを体感することができた。
・メダルには、音が鳴る仕組みが施されており、バリアフリーの考え方にも触れられた。

6. 成果

・パラリンピアンの、「『障害があるから』と否定的な考えにはならなかった」という講演の中での言葉は、児童の障害者理解への考えをより深めることができた。
・パラリンピアンの経験談から、栄光の陰には必ず人一倍の努力があることを知り、様々な競技で活躍を続ける選手を応援しようという気持ちが芽生えた。
・何事にも全力で取り組むことが大切であるという「万事全力」というメッセージは、児童の学校生活に生かしていくことができた。
・実際にパラリンピアンと児童の共演が実現したことで、パラアスリートの身体能力の高さを実感し、スポーツの魅力や身体を動かすことの楽しさを再確認できた。
・本物のメダルに触れてオリンピック・パラリンピック競技大会を身近に感じることができた。また、オリンピックとパラリンピックの競技の違いを知ることで、障害者スポーツへの理解を深め、東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会への気運の醸成につながった。

＜実践事例 葛飾区立高砂小学校＞

1. 取組・活動名

「自らのベストを目指して努力し、他者と関わり合い、力を発揮する」

2. 取組・活動のねらい

○車いすパラパワーリフティング選手を講師として招き、自分を見つめて高めていく心情や他者を尊重し合ってよりよく生きる心情を養う。
○保護者や地域住民が道徳の授業である本講演会に参加し、「心の教育」について共に考える場とする。

3. 教育課程上の教科名・時数

「特別の教科　道徳・1時間」他

4. 実施上の工夫

・オリンピック・パラリンピック選手の生き方や考え方に直接触れることを通して、夢や希望、向上心をもち、「今、何をするべきか。」を考え、目標に向かって努力しようとする心情を育てる。
・東京都道徳教材資料集やオリンピック・パラリンピック学習読本を資料として活用する。
・講演会の内容や児童の感想等を各家庭に「道徳だより」として配布する。

5. 本取組・活動の内容

「パラリンピアン講演会」

・映像も交えながら日々の生活やパワーリフティングの練習や大会について、講師の方から御講演をいただいた。
・講演には、400 名以上の保護者や地域の方々に参加していただいた。

・講演を聞いて、「これからは、今まで以上に何事にも全力で挑戦し、前向きに生きていきたい。」、「パラリンピック選手の宇城さんの表情は力強く、とても印象に残った。」という感想が、どの学年の児童からも挙がった。

・全校児童への講演後、5・6年生と実演 も取り入れた時間も設定した。
・「困難を体験したことで、人の痛みが分かり、それを思えるような強い人になれるんだと思った。」「足を失っても前を向いて、また新たな道に進んで世界で活躍するのは本当にすごいと思った。」という高学年らしい感想が挙がった。

6. 成果

・「パラパワーリフティング」というパラリンピック種目を間近で見ることで、東京 2020 オリンピック・パラリンピック大会への関心をより一層高めることができた。
・障害を受け入れ、練習や大会に挑み続けるパラリンピック選手の話を聞くことで、困難な状況に陥っても逃げ出さずに努力し続けていくことの大切さを学ぶことができた。
・障害のあるパラリンピックの選手との交流を通して、身近なところで出会う障害のある方々との関わり方について、様々な感じ方や考え方をもつ時間となった。そして、ボランティア・マインドの育成につなげていくことができた。
・保護者・地域へのオリンピック・パラリンピック教育に対する理解を深めると共に、家族の会話の内容に取り上げられ、「心の教育」を考える機会になった。

＜実践事例 昭島市立玉川小学校＞

1. 取組・活動名

「障害者理解教育」

2. 取組・活動のねらい

○東京 2020 大会後の「共生社会」を実現するため、障害者理解の学習や障害者スポーツの体験、障害者との交流を通じて、心のバリアフリーを子供たちに浸透させる。
○多様性を尊重し、共生社会の実現や国際社会の平和と発展に貢献できる力の素地を養う。
○障害のある方への理解を深め、よりよい社会を築く基礎的な考え方を身に付ける。

3. 教育課程上の教科名・時数

「総合的な学習の時間・5時間」

4. 実施上の工夫

・障害者との交流や障害者スポーツの体験を通して、障害についての学習を深めていくが、交流や体験の活動だけで終わらないように、学習のねらいを明確に示す。
・障害者スポーツの体験においては、スポーツは障害のあるなしに関わらず、すべての人にとって大切なものであることに気付くことができるようにする。
・障害者との交流においては、障害や障害者について事前に学習することにより、質疑応答を通して、障害者への理解を一層深められるようにする。
・教室の学習に留まることなく、広く地域や社会に目を向けられるようにする。

5. 本取組・活動の内容

「ゴールボール体験」

・ウォーミングアップとボールを転がしたり受けたりする練習、そしてルール確認の後、全員がゲームを楽しんだ。
・本来は、耳だけを頼りに、聴覚以外の感覚を研ぎ澄ませて行うスポーツであるが、児童が大きな不安を抱かないように、「ボールをここに置きます」「ボールがラインから出ました」などの声を出し合いながら進めた。

「視覚障害者の講話」

・目の不自由な方をお招きして、お話を伺った。
・盲導犬と一緒に不自由なく歩いたり、黒板に名前を書いて自己紹介をしたりする姿に、子供たちは驚きを隠せないようで、「どうして」「なぜ」などの質問が続いた。
・事前に学習したことを踏まえて、障害や障害者のことを少しでも知ろうと、交流を深めた。

「障害体験」

・車椅子体験や高齢者疑似体験セットの着用、アイマスクの着用を行った。
・それぞれの体験のねらいや方法が練られており、車椅子に乗ってみたとか、目隠しをして歩いてみたとか、単なる体験活動に留まることなく、体験を通して、障害や障害者について考える時間となった。
・いずれも、安全な実施に配慮しながら行った。

6. 成果

・障害者スポーツ（ゴールボール体験）では、アイシェード（目隠し）をつけて、最初は不安そうであったが、耳をよく澄ませると鈴の音でボールの位置がわかり、障害のあるなしに関わらず、誰もがスポーツに取り組めるということを知るきっかけになった。
・障害者との交流（視覚障害者の講話）では、子供たちは、事前の学習を踏まえ、構えたり躊躇したりすることなく、純粋に素朴な質問を投げかけ、障害者との関わり方などを学ぶことができた。
・車椅子体験では、実際に体験することで、日常生活での不自由さなどについて共感しやすくなりなった。また、バリアフリーやユニバーサルデザインの大切さにも気付き、偏見や差別等の人権尊重の面でも多くのことを感じ取ることができた。
・ボランティアマインドの醸成や障害者理解の取組を家庭や地域へ波及させ、子供たちだけでなく、家庭や地域を巻き込んだ取組にすることにより、共生・共助社会の形成につながる雰囲気が醸成できた。

＜実践事例 町田市立南第四小学校＞

1. 取組・活動名

「共生学習プログラム～おごり・こだわり・先入観なく～」

2. 取組・活動のねらい

○運動を通した「共感」⇒「共有」⇒「共生」の過程を経て、共生社会で生きる資質・態度を養う。
○体育学習の中で、多様な個性をもつ友達との関わり方を学び、互いに支え合う存在であることに気付かせ、支え合う行動が高まることをねらいとする。

3. 教育課程上の教科名・時数

「体育、特別活動、学校行事・15時間程度」

4. 実施上の工夫

・体育では、「共感」「共有」「共生」の場面が期待できる単元を選定して実施する。
・特別活動では、通常学級の学校行事へ、特別支援学級児童が計画的に参加する。
・特別支援学級に在籍する児童を理解させるために、全通常学級に「特別支援学級障害理解教育」を行い、他者理解の基盤を育成する。
・特別支援学級の児童の状況に応じて、教科（単元）による交流学習を行う。
・スポーツの精神「みる」「する」「ささえる」を体育科授業の振り返り（シェアリング）項目に設定し、互いの学びを分かち合う態度を育成する。
・「共感」⇒「共有」⇒「共生」の学びのサイクルを単元指導計画に導入し、課題解決を図りながら、だれとでも協力していける態度を育成する。

5. 本取組・活動の内容

「全通常学級への特別支援学級障害理解教育の実施」

・特別支援学級の児童の「こまり感」を発達段階に応じて理解させる。
・「こまり感」は、だれにでも起こることを伝え、友達がこまった状況になった場合は、どのようにすればよいかを具体的に指導する。このことで、他者理解が深まり、だれとでも分かち合うことの大切さに気付いていく。

「学びを分かち合うシェアリング」

・シェアリングは「学習の振り返り」に相当する活動のことであり、活動して気付いたことや学んだことを友達と分かち合う（「共感」「共有」）ことを目的として行うため、「シェアリング」と名付けた。授業で「する」「みる」「ささえる」の三観点で行っている。
・シェアリングは特別支援学級でも同様に実施しており、特別支援学級の児童が通常学級の授業に参加してもとまどうことなく学習に参加できるようにしている。

「「共感」⇒「共有」の段階を出現させるエブリバディ」

・単元を通して、2人組「エブリバディ」を設定する。よかったところを見付け、相手に伝えることで互いに認め合う意識をもたせる。
・同じ場で固定したグループを作ることにより、共通する「こまり感」が出て、教え合いや伝え合いが活発になると考え、「共感」⇒「共有」を単元計画に設定する。

「共有⇒共生を出現させる交流学習」

・共感⇒共有の経験を土台として、交流学習を実施する。単元は、特別支援学級の児童と通常学級の児童が、相互に支え合い、高め合える教材を設定する。
・「5年生ボール運動（ソフトバレーボール）」では、ネット際でサーブを打つことを認めたり、練習で励まし合ったりする場面が表出した。

6. 成果

・全通常学級への特別支援学級障害理解教育が、共生学習プログラムの根幹であり、今後もさらに充実させ、継続して実施していく。
・課題を認識することで「共感」する態度が生まれ課題を解決していくことで「共有」する態度が育ち、さらに高め合っていこうとすると共生社会への態度が育成されることが分かった。
・学校生活全般で、通常学級の児童と特別支援学級の児童が互いに支え合い、高め合う場面が増えた。
・単元計画に「共感」⇒「共有」⇒「共生」の段階を設定することで、期待する児童像を明確にし、具体的な指導方法を工夫・改善することができるようなってきた。

＜実践事例 国分寺市立第七小学校＞

1. 取組・活動名

「オリンピック・パラリンピック教育 ～障害者理解の促進～」

2. 取組・活動のねらい

○ 障害のある友達との交流から共生の心を育てる。
○ パラアスリートとの直接交流を通して、障害理解を促進する。
・ゴールボールパラリンピアンによる講演及び体験学習（全校）・給食交流（6年生）
・パラ水泳アスリートによる講演及び体験学習（全校）・給食交流（4・5年生）

3. 教育課程上の教科名・時数

「体育、特別活動・4時間（各学年）」

4. 実施上の工夫

・本校の特別支援学級について知り、自分自身との違いや共通点に気付かせる。
・本校のオリンピック･パラリンピック教育における重要な事項として、全学年がその発達段階に応じて、体験学習や夢に向かって努力を重ねている講話を受けられる場面を設定した。
・障害者スポーツの「ゴールボール」や「パラ水泳」について、児童が体験・交流し、障害者スポーツを知るとともに、様々な努力や工夫についても理解を深められるようにした。

5. 本取組・活動の内容

「き・こ・う集会（障害理解教育）」

・隣の友達と得意なこと、苦手なことについて話し合う交流を通して、一人一人が同じでないことを理解した。それと同じように、けやき学級（知的障害固定学級）やこすもす教室（特別支援教室）の友達とは、学校での学び方が違う事を理解するとともに、一生懸命頑張っていることは共通しているということの理解を深めた。
・かかわり合いで大切な合言葉「き･こ･う」とは、自分で気付いて（き）、声をかけ（こ）、動く（う）ことであり、「思い」は見えないし、聞こえないものだから、「き･こ･う」で見えて聞こえる「思いやり」にしようという考え方を共通理解した。

「ゴールボールパラリンピアンとの交流」

・パラリンピアンが専用ボールを掲げ、重いか重くないかのクイズから交流がスタートした。「重いと思う人は?」と問われて黙って挙手する児童に、それではわからないから声や拍手で教えてくださいとおそわるなど、大切なコミュニケーションの在り方について学んだ。
・児童同士の専用ボールを使った「キャッチ&スロー」、「3対3のミニゲーム」、そして「アスリートに挑戦コーナー」で親しむことができた。
・パラリンピアンから「2020 年金メダルへの大きな夢がある。そのために、今日も一生懸命、練習を取り組むので、たくさん応援してほしい」という声に、大きな拍手が湧いた。

「パラ水泳アスリートとの交流」

・5・6年生は、100 mバタフライ、背泳、自由形で国内外の大会に出場しているパラアスリートの泳ぎを水中で目視し、抵抗の少ない水中姿勢やまっすぐ泳ぐための一連の動きを間近に見ることで、無駄な力を抜くことの大切さを実感できた。
・「パラ水泳バタフライの泳法基準が変更され、自分にとっては不利な条件となったけれど、これまでの自分を信じて対応していく」というアスリートの話から、挑戦を続ける姿を学んだ。
・知的障害学級では、事前学習として教室での自己紹介を一人ずつ行い、親交を深めた。

6. 成果

・ 全校児童による直接交流に重点を置き、学年単位で体験的な学習を実施したことで、パラリンピックへの関心が高まり、障害者や障害者スポーツへの理解が深まった。

【児童の感想から】
・心の中で助けようと思っていても行動に移さないと何も起こらない。
・行動するには勇気がいるけれど、少しずつできるようにしていきたい。
・学ぶ場所は関係なく、その人自身が真剣にやっているかどうかが大切なのだ。
・給食交流で、練習内容やキャプテンとして大事にしていることを聞くことができた。
・目標は金メダルということを聞き、全力を挙げて、自分たちの夢に向かっていることがわかった。
・けのびでは頭を上げないようにとアドバイスされたのでそのことを注意してやってみたら、前と比べてとても速くなった。
・ぼくは、東京 2020 でオリンピックだけでなく、パラリンピックも見ようと思った。

＜実践事例　品川区立鈴ケ森中学校＞

1. 取組・活動名

「障害者スポーツについて学ぶ」

2. 取組・活動のねらい

○ウィルチェアラグビー、シッティングバレーボール、ブラインドサッカーなどの体験を通して、障害者スポーツについて理解を深める機会にする。
○障害者スポーツを体験することで、相手の立場に立って物事を考えることの大切さを学び、行動に移せるようにする。
○互いの違いを認め合い、個性を尊重し合うことの大切さに気付くことができる。

3. 教育課程上の教科名・時数

「市民科・3時間」「保健体育科・2時間」

4. 実施上の工夫

・障害者スポーツへの理解を深めるため、事前事後の学習として『オリンピック・パラリンピック学習読本』の「パラリンピック競技以外の障害者スポーツを体験しよう」、『よういドン!しながわ（5～9年）』の「品川区応援競技ブラインドサッカー」、『I’m possible 2−1』の「パラリンピックスポーツについて学ぼう」を活用した。
・特別授業について、学校便りや保護者向け通知などで周知し、保護者や地域から幅広く参観者を募った。

5. 本取組・活動の内容

「シッティングバレーボール体験」

・障害者スポーツの一つであるシッティングバレーボールの特性や基本的技法について学習した。
・生徒からは、「たやすくできると思っていたが、実際に体験してみたら難しかった。」、「障害者も健常者も一緒に楽しめるスポーツだと思った。」等の感想があった。

「講演：共生社会の実現について」

・長野パラリンピック金メダリストを講師として招き、講演を実施した。
・障害者に対する日本と外国の意識の違いや環境の違いに気付くことができた。
・共生社会を実現するためには、固定観念を捨て、柔軟に発想を変えていく姿勢が重要であることを学ぶことができた。

「障害者スポーツについて学ぼう」

・どんな工夫をすれば、障害者がもっと多くのスポーツを楽しむことができるか、グループで話し合った。
・話合いを通して、用具を工夫したりサポーターが補助したりすれば、誰もがスポーツを親しめるということに気付くことができた。
・障害者スポーツはたくさんの工夫や技術によって支えられていることを学ぶことができた。

6. 成果

・様々な障害者スポーツに対する興味・関心を高めるとともに、そのレベルが非常に高いことに気付かせることができた。
・これからの共生社会の実現に向けて、「自分たちに何ができるか」という考えや「少しの工夫で、不可能が可能になる」という視点をもたせることができた。
・障害者スポーツとして実施されている競技がまだ少ないことに気付かせることができた。しかし、ルールや用具を工夫することで、障害者と健常者が共に楽しめるスポーツとなることを実感させることができた。
・『よういドン!しながわ（5～9年）』（品川区教育委員会）を活用して、本区の応援競技であるブラインドサッカーの競技理念、ルール等について理解させることができた。さらに、ブラインドサッカー体験教室における選手との触れ合いの中で、相手の立場に立つことの大切さに気付かせることができた。

＜実践事例　杉並区立大宮中学校＞

1. 取組・活動名

「パラリンピックを知り、障害者理解を深めよう」

2. 取組・活動のねらい

○パラリンピアンの講演、デモンストレーションを見て本質を知る。
○障害があっても、目標をもって前向きに努力することの大切さを知る。
○障害のある方の生活を知り、自分がどう行動すればよいか考えるきっかけとする。
○パラリンピックの種目の見学、体験を通して2020年に向けての意識を高める。

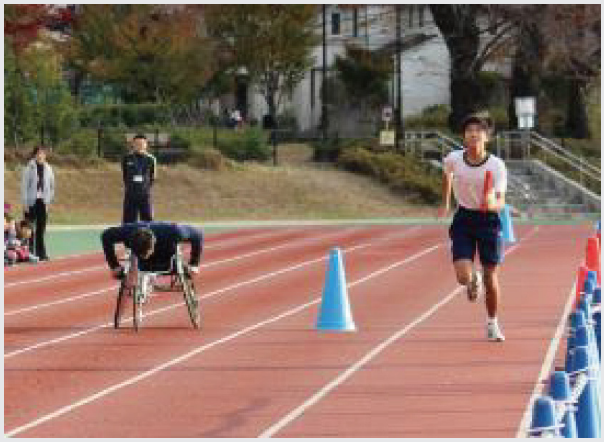
3. 教育課程上の教科名・時数

「総合的な学習の時間」
パラリンピック種目紹介・体験　3種目「各2時間」

4. 実施上の工夫

・パラリンピック・アスリートの中でも金メダリストを招へいし、本物の金メダルに触れさせた。
・近隣小学校にも声をかけ、小中合同授業、地域のイベントとして実施した。
・障害者の生活を理解するために、事前に障害者、高齢者の生活について学習した。
・見学するだけでなく、興味関心や探求心を高めるために、代表生徒による体験を実施した。
・オリパラ学習係を公募し、生徒中心に学習を進めた。

5. 本取組・活動の内容



「体験授業・パラ陸上競技」

・本校に隣接する陸上競技場で、小中一貫教育連携校の小学生と一緒に体験を行った。
・競技用車いすをお借りして生徒が実走したり、代表児童・生徒と400m対決を実施したりするなど貴重な体験となった。
・アスリートは先天的な下肢欠損であるが、スポーツが好きで何事にも前向きに生活されていることが伝わってきた。

「体験授業・ゴールボール」

・体育館にゴールボールのコートを設営し講演の後にデモンストレーション、対戦を実施した。
・無音、無声の状況の中で行う競技のため、見ている生徒も集中し、チームプレイによる互いの信頼感、視覚障害者であるがゆえの研ぎ澄まされた集中力を感じることができた。

「講演・ブラインドマラソン伴走」

・アスリートが全力を出し切れるようにサポートする立場として、パラリンピックの講話だけでなく、視覚障害者への日常のサポート方法についてもお話しいただいた。
・アスリートだけに注目が集まるが、伴走者も共に戦っているという高い意識が伝わってきた。

6. 成果

・障害者スポーツを見学・体験することを通して、障害があってもアスリートとして努力する力強さを感じることができた。
・障害者の日常生活を知り、また、その不自由さを感じることで、自分でもできるサポートの必要性を知ることができた。
・金メダルという夢をかなえたが、それで終わりではなく、その先も努力されていることを知ることができた。
・小中合同授業を実施することにより保護者の参観も増え、地域としてオリンピック・パラリンピックへ向けての意識を高めることができた。
・数種類のパラリンピック種目を知ることによりパラリンピックを身近に感じ、他の種目への探求心を高められた。

＜実践事例　清瀬市立清瀬第五中学校＞

1. 取組・活動名

「オリンピック・パラリンピック教育　～障害者理解の促進～」

2. 取組・活動のねらい

○真の共生社会を実現するため、障害者理解の学習・体験や交流を通じ、多様性を尊重し障害を理解する心のバリアフリーを子どもたちに浸透させる。
○トップアスリートとの交流を通して、オリンピック・パラリンピックの意義を理解させる。
○明るく平和な社会の実現に尽くす実行力のある生徒を育成するとともに運動やスポーツへの興味関心を高め、体力向上・生きる力の伸長を図る。

3. 教育課程上の教科名・時数

「保健体育科 総合的な学習 家庭科・各2時間」

4. 実施上の工夫

本校では「オリンピック・パラリンピック教育」における育成すべき人間像の中から、
・自己を肯定し、自らの目標を持って自らのベストを目指す意欲と態度を備えた人間の育成ついて取り組んだ。
・多様性を尊重し、共生社会の実現や国際社会の平和と発展に貢献できる人間の育成について取り組んだ。
・体験や活動を通じて学ことを重視し取組んだ。

5. 本取組・活動の内容

「パラリンピアンによる特別授業」

・リオデジャネイロパラリンピック開催年及び翌年にアスリートを招き、ゲストティーチャー授業（水泳）を実施した。
・パラアスリートの泳ぎを体験（左半身のみ使用しての腕のかき・足のけりや黒く塗りつぶしたゴーグルを使用）することで困難を克服し努力を続けることの大切さを学ぶことができた。

「パラアスリートによる特別授業」

・本校では４年前からパラアスリートによる特別授業「ブラインドサッカー」を継続的に実施している。
・今年度、新たに「障害者バドミントン」選手による特別授業も実施し、様々な障害についての理解を深めるとともに、トップアスリートのスキルを体験することで、障害者スポーツへの理解が深まった。

「認知症サポーター養成講座」

・第2次清瀬市教育総合計画マスタープラン５つの柱の1つ『健やかな心と体を育てる』にある、「豊かな心と撓しなやかで強したたかな心の育成」にむけた取組を行った。
・この取組から、地域で生活している認知症高齢者が安心して生活できるようにすることや、現在の社会問題について考えるきっかけをつかむことができ、自他の生命を大切にする意識が育成された。

6. 成果

・オリンピック・パラリンピック教育学習読本及び映像教材を活用し事前学習をしたうえで、パラリンピック出場選手による水泳授業及び交流会を本大会前に実施することができたことから、生徒たちは本大会に興味を持ちながら観戦することができたとともに障害者スポーツへの理解を深めることができた。
・パラアスリートとの交流で、失われたものを数えるのではなく、今ある能力を最大限に生かすことの大切さを学ぶことができた。
・アスリートや地域人材との直接的な交流を通して、共に助け合い、支え合って生きていく力を身に付けるきっかけをつかむことができた。

実践事例

スポーツ志向

＜実践事例　大田区立萩中小学校＞

1. 取組・活動名

「体育・健康教育授業地区公開講座」

2. 取組・活動のねらい

○オリンピックに対する理解を深め、2020 東京オリンピック・パラリンピックの開催国民であることへの意識と自覚を高める。
○オリンピアンとの交流を通して、夢や目標をもつこと、質の高い努力をすることの大切さを学び、自分自身の人生に役立てる。
○オリンピック種目を体験したり、オリンピアンの演技を間近で見たりすることによってスポーツのもつ魅力に触れ、スポーツと豊かに関わる。

3. 教育課程上の教科名・時数

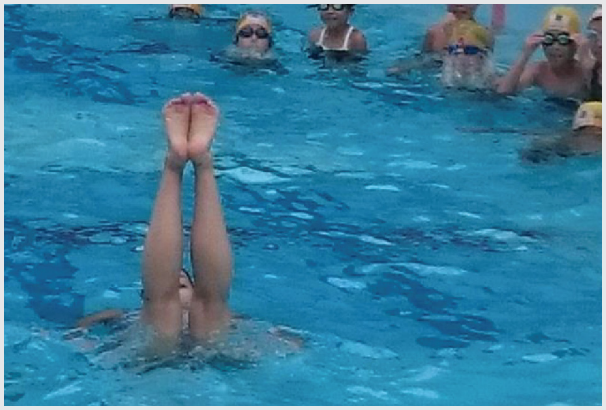
「体育・2時間」「道徳・1時間」

4. 実施上の工夫

・オリンピアンと事前打ち合わせを行い、本校児童の実態とねらいを確認し、実施内容を検討した上で当日を迎えた。
・地域、保護者に本事業の開催を周知し、地域と連携した取組にした。
・実践の様子を「萩中小学校オリパラ通信」にまとめ、各家庭や地域に配布したり、ホームページに掲載したりして広く周知した。

5. 本取組・活動の内容

「アスリート講演の様子」
・「夢をかなえるために」の演題で講演をいただき、オリンピアンとしての責任の重さや大切にしているコーチの言葉を紹介して自分の夢をかなえるまでの道のりをお話しいただいた。
・強化合宿の様子やオリンピック本番の演技を映像で紹介していただいた。
・想像を絶する厳しい練習とメダル獲得の瞬間の映像を見て、体育館中が感動に包まれた。



「体験授業の様子」

・シンクロナイズドスイミングの基本的な技能やスピンなどの難易度の高い技を披露していただいた。
・「クロールや平泳ぎも速く泳げるのですか?」という質問に 25 mをクロールで泳いでくださった。あまりの速さに驚きの声が上がった。・ノーズクリップという鼻に水が入らないようにするための道具も紹介していただいた。

「体験授業の様子」

・3・4年生が、生まれて初めてシンクロナイズドスイミングを体験した。
・スカーリング（手を使って体を浮かせる技能）や足上げなどの基本技を指導していただいた。
・実際にやってみると難しい様子ではあったが、コツをつかんで浮くことができたり、みんなで同調して動いたりできた時の喜びは大変大きかった。

6. 成果

・オリンピアンの 2016 リオデジャネイロオリンピック競技大会での活躍の様子を見たり、体験学習で実際に交流したりすることでオリンピックの素晴らしさやオリンピアンの凄さを実感し、スポーツへの興味・関心が高まった。
・夢をかなえたオリンピアンの話に感動するとともに尊敬の念を抱き、スポーツに限らず夢をもつことや苦しくてもあきらめずに毎日の努力を続けることの大切さを学んだ。また、自分の夢に向かって頑張る気持ちを強くもつことができた。
・スポーツの楽しさ、体を動かすことの楽しさ、人と交流する楽しさを十分に味わうことができ、生涯スポーツの観点でも大変貴重な時間となった。
・保護者、地域の方々にオリンピック・パラリンピック教育の周知することができた。

＜実践事例　豊島区立富士見台小学校＞

1. 取組・活動名

「ころりんピック」

2. 取組・活動のねらい

○マットを使った運動遊びの体験を通して、オリンピック・パラリンピックへの、興味・関心とスポーツ志向を高める。
○フェアプレーやチームワークを通して、「友情」「勇気」の精神を育む。

3. 教育課程上の教科名・時数

「体育、道徳、特別活動・6時間」

4. 実施上の工夫

・児童にとっての「ころりんピック」を、スポーツ選手にとってのオリンピック・パラリンピックと同様に捉え、スポーツは、選手の努力のほか、大会等を運営する方々の協力、応援があって成り立つことを、道徳を通して教科横断的に学ばせる。
・フェアプレーの精神をもって応援したり、実際に自分でやってみたりすることで、オリンピック・パラリンピックへの興味・関心とスポーツ志向を高める。
・単元の最後に、これまでの学びの発表の場である「ころりんピック」を設定し、児童の意欲を高め、できるようになった技を自覚させるとともに、達成感や自尊心の向上につなげる。
・ころりんピックでは、学級活動で考えた「応援コール」や「いいぞコール」を自主的に使わせることで、「友情」「勇気」「フェアプレー」の精神を高めさせる。

5. 本取組・活動の内容

「ころりんピック」

・第1・2時は、体育館フロアに様々なマット遊びができる場所を設定し、ゆりかごや前転、側転などを体験できるようにした。
・第3時は、発表会に向けた練習を行った。
・第4時は、前時の技の練習後、ころりんピックを行った。
・年間を通したフェアプレーの表彰
（例）一生懸命練習することができた児童に「熱心に練習できたで賞」メダルを授与

※他の「スポーツ志向」を醸成する取組
「安全体つくり体操」

・体幹を鍛え、転びにくい体をつくるために、理学療法士の方々と「安全体つくり体操」を開発した。全学年、体育の授業を始める際には、「安全体つくり体操」を必ず行っている。
・Y-T バランスや天井ジャンプ、回転ジャンプ、ねこバランス、腕立て伏せなど、本校のオリジナルソングに合わせて体操する。
・この体操を地域にも広め、高齢者の方にもけがをしない健康な体をつくっていただくよう、高齢者向けの体操を作成し地域に広めている。

「運動会エンブレム」

・運動会の前に、運動会のエンブレムをつくる体験を通して、オリンピック・パラリンピックへの興味・関心を高めた。
・完成した作品は、運動会練習中から当日まで児童玄関に展示した。これにより、全校児童の運動会に向けての気持ちが高まった。
・運動会当日には、保護者や地域の方にも作品を見ていただき、児童の運動会にかける思いを理解してもらうことができた。

6. 成果

・道徳で思いやりを考え、学級活動でコールを作るなど、合科的な指導を実施することにより、ねらいをより効果的に達成することができた。
・運動が苦手な児童もいる中で全ての児童が回転技を習得し、スポーツ志向の資質を高め、教科目標も達成することができた。
・フェアプレーカード（ふりかえりカード）の取組で、児童の思いやりが育った。
・「ころりんピック」大会の設定により、児童が前向きで意欲的に取り組むことにつながった。
・低学年の児童は形を示す中で育ち、形から入ることで中身が充実していく。本取組で応援をしたり応援をされたりする中で、互いを認めたり認められたりして思いやりの心が育まれた。

＜実践事例 立川市立第五小学校＞

1. 取組・活動名

「ゲストティーチャーから学ぼう」

2. 取組・活動のねらい

○ 2020 年に開催されるオリンピック・パラリンピックに積極的に関わることで、生涯を通してスポーツに取り組み、健康増進を図る意識を高めとともに、日常的に体力向上や運動に対する興味・関心を高める。
○アスリートから直接指導を受けたり、話を聞いたりすることで、夢をもつこと、あきらめないで努力することの大切さを実感させる。
○日本の伝統・文化に興味・関心をもち、日本人としての誇りを大切にする心情を育てる。

3. 教育課程上の教科名・時数

「総合的な学習の時間、特別の教科　道徳、体育」・「4時間」

4. 実施上の工夫

・年間指導計画に基付き、年間を通して取り組める活動は 1 学期中に、単元によって重点的に取り組む活動は学期ごとに計画的に実施した。
・アスリートとの交流を深めるために、講演会だけではなく、給食などの直接的な交流を通して、選手からスポーツに対する考え方を聞き、興味・関心を高めた。
・身近に存在するアスリートを招致することで、夢や努力の大切さを自分事として考えられるようにした。

5. 本取組・活動の内容

・ビーチバレーボール選手による実技指導を実施した。普段の練習で取り入れている準備運動やボールの扱い方を教わった。

・給食交流では、スポーツに取り組む姿勢や食の大切さを教わった。

・立川市のラジオ体操協会の指導者を招き、全学年でラジオ体操の正しい動きを教わり、その後、体育の授業や運動会の準備運動で取り組んでいる。
・児童がラジオ体操の正しい動きを身に付けることで体育の授業での準備運動の質が向上し、運動会では演技としての要素が高まった。

・本校卒業生の落語家を招き、5 年生を対象に落語教室を実施した。
・衣装や小道具などの説明と落語を 2 席行った。
・児童の落語体験を実施し、興味･関心を高めた。

6. 成果

・ゲストティーチャーを招致することで、子どもたちの興味・関心は高まり、夢をもつことや努力の大切さを実感させることができた。また、直接指導を受ける、児童自らが体験するという活動を取り入れることで、意欲的な取り組みにつながった。
・いろいろなスポーツへの関心をもつようになり、2020年のオリンピック・パラリンピック出場を目指す選手を応援したいという気持ちをもつようになった。活動後すぐに、SNS を通して選手を応援する児童もいた。

＜実践事例　東大和市立第五中学校＞

1. 取組・活動名

「アスリートによる実技指導と交流会」

2. 取組・活動のねらい

○オリンピック・パラリンピック教育の一環として陸上競技に関わるアスリートを招待し共に運動をすることで、保健体育科の課題である「持久力」の向上を図る。
○現役の長距離ランナーと交流することで努力することの大切さを知る。
○外国人アスリートとの交流を通して豊かな国際感覚を養う。

3. 教育課程上の教科名・時数

「保健体育・1時間」「総合的な学習の時間・2時間」

4. 実施上の工夫

・オリンピック・パラリンピック教育推進事業「夢・未来プロジェクト」を活用した。
・アスリートの実技指導として、保健体育の授業で体験的な取組（補助運動、サーキットトレーニング、アスリートへの挑戦等）を実施した。
・講演会ではアスリートと生徒とのトークセッションを企画する。トークセッションは代表生徒を選び、事前に質問事項を準備して本番に臨んだ。
・講師のアスリートが代表の学級に行き、共に給食を食べて交流を図った。
・保護者や地域にも講演会の案内を配布して当日の参加を募った。

5. 本取組・活動の内容

「保健体育の授業による実技指導」

・ケニア出身のアスリート（長距離選手）が保健体育の授業で持久走に関する実技指導を行った。
・生徒はケニアドリル（準備体操）を体験し、持久走に必要な体の動かし方や筋肉の使い方について理解した。
・1500m走において中学生がリレー形式で現役のアスリートに挑戦して、世界レベルの実力を体感した。

アスリートとの給食交流会

・ケニア出身のアスリートが、第3学年の代表学級の生徒と共に給食を食べて、和やかに交流する場面ができた。
・アスリートと生徒の会話が弾み、日本とケニアの生活や文化などについて互いに意見を交わすことができた。

「講演会とトークセッション」

・全校生徒を対象にアスリートによる講 演会を実施してケニアの生活や日本の印 象について話を聞いた。
・講演会の後半は代表生徒とアスリート とのトークセッションを実施した。教員が進行役となり、生徒が事前に準備してきた質問事項についてアスリートが回答する展開で交流を深めた。トークセッションの中では、ケニアドリル（準備体操）を生徒に紹介する場面があって、和やかな雰囲気で会が終了した。

6. 成果

・現役の長距離ランナーの実技指導によって、生徒は一流選手の走り方を直に感じることができて、走ることに対する関心や意欲が一層高まった。
・スーパーアクティブスクール指定校として、運動能力（特に持久力）を向上させるための要点を押さえることができた。
・ケニアの生活や文化の話を聞くことで自分の生活や日本の文化を見直す機会となった。
・代表生徒によるトークセッションを実施したことにより、生徒の自主性を引き出すことができた。
・授業や給食においてアスリートと生徒が身近に交流することができて生徒のコミュニケーション能力が高まった。
・保護者や地域の方々にオリンピック・パラリンピック教育の内容を周知することができた。

＜実践事例　東京都立東大和高等学校＞

1. 取組・活動名

「スポーツ志向・オリパラ競技力向上を目指して」

2. 取組・活動のねらい

○ 各部活動において、中学生を対象とした合同練習会を開催した。互いの競技力向上やスポーツを楽しむことを目的とし、高校生と中学生が同一種目で交流を行うことができた。
○ 本校の卒業生でもあるオリンピアンを招き、講演会を実施した。平昌五輪に出場した結果報告をしていただき、日頃の生徒自身の活動を見直す良い機会をつくることができた。
○「チーム東大和」として、日頃の部活動の大会日程や結果等の共有、オリンピックに関連した授業での学習や有志活動の報告など掲示板を利用してオリパラ教育への理解と関心を高める。

3. 教育課程上の教科名・時数

「特別活動他・10時間」

4. 実施上の工夫

・「スポーツの振興」を教育目標とした本校の特色の一つである、「積極的な部活動」を活かした形でオリパラ教育を推進している。
・ 中学生との部活動体験の機会をより一層充実させ、大会等のオフシーズンや長期休業期間等時間的にも余裕のある時期に複数回にわたって実施した。
・ より身近なオリンピアンとして今回は本校卒業生を講師として招いた。当時の担任や授業担当者と一緒に登壇し、パネルディスカッションという形で実施した。
・ できているようでできていない日頃の活動やその成果を共有するため、掲示板を購買前や体育棟に設置した。各部の部長中心に随時更新させている。

5. 本取組・活動の内容

「部活動体験会」

・陸上競技部の体験会では、100 名を超える中学生が参加し、種目ごとの練習を実施した。暑い中での活動だったが、中学生、高校生ともに真剣に取り組んでいた。
・また、フィジカルコーチを招いてのトレーニング指導や、体のケア方法など、他の部活においても同様の活動を実施した。

アスリート講和

・平昌五輪直後に、本校卒業生のアイスホッケー女子日本代表選手に来ていただき、五輪の様子などについて話していただいた。
・五輪前に日本で行われた壮行試合には、教職員や同級生も駆け付け、日の丸を背負う床選手の姿を応援した。

「その他の取組」

・チーム東大和掲示板で大会情報を共有している。生徒の目につきやすい体育棟や購買前設置している。
・世界ともだちプロジェクトの一貫として「現代社会」の授業でオリンピック・パラリンピック参加国について調べたものを掲示している。
・体育の授業においてパラリンピックのスポーツ体験等を実施した。
・オリンピック掲示板を作成し、オリパラに関する活動を発信した。

6. 成果

・中学生との部活動合同練習会を、各々の競技レベルや課題に適した形で実施したことにより、中学生は今後の活動のよき見本を知り、高校生は指導する側として新たな視点から競技力に高めることができた。
・より身近な先輩がオリンピック選手として活躍していることから、オリンピックへの関心を高めるとともに、自身の各競技への取り組みを見直す良い機会を作ることができた。また、夢を持って挑戦し続けることの大切さを肌で感じることができた。
・各部活動同士が良い刺激をしあう中で、切磋琢磨していく学校の雰囲気ができたことに加え、授業の取り組みや有志活動により「東京 2020 大会」への関心を高め、それに向けた取り組みを行っていく気運を築くことができた。
・本校では、生徒自身が活動への誇りと自覚を持ってそれぞれの部活動に取り組んでいる。学校生活においても部活動単位での活動が多くみられ、「スポーツ志向」の資質の高まりを感じている。

実践事例

日本人としての自覚と誇り

＜実践事例　小金井市立緑小学校＞

1. 取組・活動名

「日本人としての自覚と誇りの育成」

2. 取組・活動のねらい

○日本の伝統・文化に直接触れる機会を多くもち、その良さを感じ、大切にしていこうとする意識を育てるとともに、豊かな国際感覚を育むことでオリンピック・パラリンピックに向けての意識を高める。
○日本の伝統・文化を体験することで、多様な視点から日本人らしさを考えることができ、日本人のマナーに誇りを感じ、実践していこうとする意識を育てる。

3. 教育課程上の教科名・時数

「総合的な学習の時間・音楽・生活科等・各学年5時間程度」

4. 実施上の工夫

・オリンピック・パラリンピック教育推進担当を校務分掌に位置付け、各学年と連携し計画的に日本の伝統・文化の専門家をゲストティーチャーとして招くことができるようにした。
・年間指導計画に基づき、日本の伝統・文化を学ぶ取組を全学年で系統的に行うことで6年間を通じて学びが深まるようにした。
・体験をするだけでなく、体験したことを外国人に伝える活動も行い、日本について自分の言葉で話すことを目指した。。

5. 本取組・活動の内容

「落語教室」
・落語家の方をゲストティーチャーに招き、落語を実際に見せていただいた。
・落語では、声色を変えて、1人6役位演じることや、扇子や手ぬぐいを道具に見立てることを知ることができた。
・実際に蕎麦をすする仕草の練習をしたり、和太鼓を効果音として叩いたりする体験を通して、表現する面白さを楽しむことができた。

「お箏教室」

・山田流の方をゲストティーチャーに招き、お箏の演奏を聴いたり、実際に「さくらさくら」を演奏したりした。
・お箏の演奏を教わる中で、お箏の独特な音階の読み方を知ったり、日本らしい音の響きを味わったりすることができた。

「能楽講座」

・社会の歴史の学習や国語の狂言の学習を生かして、狂言について調べ、その良さを留学生に紹介した。
・その後、観世流能楽師の方をゲストティーチャーに招き、能楽についても学習した。能面を付けて歩いたり、小鼓を打ったりする体験を通して、歴史ある古典芸能の世界に触れ、その良さを実感できた。

6. 成果

・上記の取組以外でも、小金井市の伝統・文化である貫井囃子、現代俳句協会による俳句教室等の体験活動を含め、全学年において「日本人としての自覚と誇り」を高めるための実践を行った。どの活動においても、「楽しかった」「また体験したい」という児童の意見が多く、日本の伝統・文化を身近に感じさせることができた。
・体験的に学ぶことにより、日本の良さに気付き、伝統･文化を大切にしていこうという意識が高まった。また、日本人のおもてなしの心が海外でも評価されていることを知り、日本人のマナーに誇りを感じ、実践していこうとする意識が高まった。
・多くのゲストティーチャーを招き、交流することで、実感をもって学ばせることができた。また、ゲストティーチャーとのつながりも増え、来年度以降も継続して実践を行えるようになった。

＜実践事例　あきる野市立一の谷小学校＞

1. 取組・活動名

「伝統芸能の体験を通して郷土を愛する心を育てる」

2. 取組・活動のねらい

○一人一人が気持ちを込めて伝統芸能を発表することで、伝統芸能に親しみ、表現する楽しさを味わう。
○地域に伝わる伝統芸能の良さを再認識し、郷土を愛する心や誇りをもって豊かに生活しようとする心を育てる。
○上級生から下級生に芸を教えることで、伝統を受け継ぐ心を育てる。
○練習や発表を通じて、保護者や地域の人々との連携を深める。

3. 教育課程上の教科名・時数

「総合的な学習の時間・3年生23時間、4・5年生20時間、6年生26時間」

4. 実施上の工夫

・毎年、学年ごとに決まった演目を発表することで、見通しをもって取り組む。
・下学年は上級学年への憧れを抱き、上級学年は下学年の発表を見て過去の体験における感動を想起できるようにする。
・「引継ぎ会」を行うことで、伝統の素晴らしさを共有し、引き継いで行くことの大切さを学ばせる。
・「伝統・文化ファイル」に学習の記録を綴じることで、6年間の体験と学習を積み重ねていく。

5. 本取組・活動の内容

「引継ぎ会」

・伝える学習では、児童が個々にもっている「伝統・文化ファイル」を活用し、伝える前に昨年度の演目を振り返り、教え伝えるために演目の「コツ」についてまとめる。
・教える学習では、教えてもらったコツをしっかり書きとめ、実際に動いて覚える。
・教える立場の難しさを体験することによって、教わる立場のときに、より真剣になって学ぶ姿が見られた。6年生は、伝統・文化発表会後に「四つ花」を5年生に引き継いで6年間の学習のまとめとなる。

「保存会の方からの指導」

- 児童同士の引継ぎを終えた後に、保存会 の方々から本格的な指導を受けた。
- 保存会の方の笛が入ると、一気にお囃子の雰囲気になり、また、保存会の方に目の前で動きを見せていただくことによって、少しでも近づけようと真似をするなど、集中して学ぶ姿が見られた。
- 笛と合わせる難しさを感じ、児童から「もう一回お願いします。」の声が何回も出るほど、真剣に取り組んだ。

「伝統・文化発表会」毎年、1月下旬に行っている。

- 1年生（囃子）「にんば」バケツ太鼓
- 2年生（囃子）「にんば」ツケ太鼓
- 3年生（囃子）「にんば」のリズムで「おかめ・ひょっとこ」の創作の踊り
- 4年生（囃子）「屋台」のリズムで「天狐」の創作の踊り
- 5年生（獅子舞）「御神楽」
- 6年生（獅子舞）「四つ花」

6. 成果

- 囃子では、太鼓、鐘、踊り、獅子舞では獅子と花笠など、一つの演目でそれぞれの役割を演じるが、それにより、みんなで創り上げるという意識が高まった。
- 保存会の方から直接指導を受けることで、自分の課題を見出し、その課題を克服することでより良いものを目指そうとする意識が高まった。
- 毎年、学年ごとに決まった演目を発表することで、下学年は上級学年の発表を見て憧れを抱き、また、上級学年は下学年の発表を見て過去の体験における感動を想起させることができた。
- 学年間で行う「引継ぎ会」の学習では、引き継ぐ立場、引継ぎを受ける立場と両方体験することで、伝統の素晴らしさを共に高め、引き継いでいくことの大切さを知ることができた。

＜実践事例　西東京市立谷戸第二小学校＞

1. 取組・活動名

「わたしたちの町はすてきな町～見のがしてたね西東京市～」

2. 取組・活動のねらい

○町の良さや課題に気付き、地域の一員としてよりよい町づくりに主体的にかかわろうとする児童を育成する。

3. 教育課程上の教科名・時数

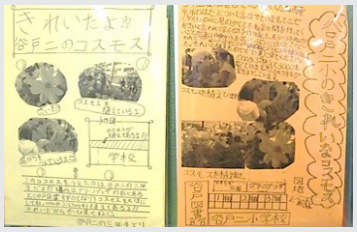
「総合的な学習の時間」・「70時間」

4. 実施上の工夫

・探究するための学習材として「見のがしてたね西東京市」の旗を取り上げ、この旗を作成した市役所の方に直接インタビューをする場面を設定した。
・見のがしていることの一つに、西東京市の花に関わる活動があるということに気付き、花に関わる活動をしている市役所のみどり公園課の方、花の会の方、地域のボランティアの方たちと一緒に、花いっぱい運動に参加し、コスモスを植える活動を行った。
・活動を地域に知らせるために、チラシやポスターなどを作成し、配布した。
・「見のがしてたねガイドマップ」を作成し地域に配布した。

5. 本取組・活動の内容

・「見のがしてたね　西東京市」の旗について、自分たちが見のがしてた西東京市は何なのか、どういう思いでこの旗ができたのかとうことを知るために、市役所の方に話を伺った。
・見のがしていたことを調べ、「見のがしてたね新聞」を作成し、発表した。
・「見のがしてたね新聞」の中から花に関する記事を取り上げ、「みのがしてたねガイドマップ」を作成した。また、地域のいろいろな施設におかせていただいた。



・花がきれいな町ということに気付き、地域の花いっぱい運動に参加した。
・校舎脇の花壇を市役所の方や西東京花の会の方、地域のボランティア、育苗センターの方、造園会社の方など、多くの人が関わり、一緒に1000株3000本のコスモスを植えた。
・コスモス畑を地域に周知するためにチラシを作成し、配布した。

・コスモスが枯れた後の花壇をどうするか話し合い、自分たちで次の花を植える計画を立てた。
・冬から春にかけて咲く花やおすすめの花を花の会の方などにインタビューした。
・植える花の種類と花壇のデザインを考えた。
・花の会の方々に再度協力していただき花を植えた。
・その後、花を植えたことを地域に発信した。

6. 成果

・花いっぱい運動に参加することで、市役所の人の願いや、町を良くしようとしている地域の人の努力を知ることができ、一人一人が地域をより良くしていく一員だという自覚をもつことができた。
・探究と協働の活動を通して、一人一人が課題意識を明確にもち、主体的な学びとなった。
・コスモスを植えたことや、自分たちで花を植えたことなど、花いっぱい運動を行い地域住民へ知らせることで、地域の人が花壇を見に来てくれた。
また、そのことについての、地域の別々の方からお礼の手紙や励ましの手紙が届いた。そのことも、自分たちの取り組みについて地域の人から反響があったことで、自分たちも地域の一員なんだという自覚をもつ一つの要因となった。また、その手紙によって、さらにやりがいを感じたり、自己肯定感を育てたりすることにもつながった。

実践事例

豊かな国際感覚

＜実践事例　中央区立久松小学校＞

1. 取組・活動名

「豊かな国際感覚の醸成・世界の文化を知ろう」
中国の子供たちやスペインのキンボール選手などとの直接交流活動や、フラメンコ鑑賞会、コロンビア大使館との交流、JICA 国際理解教室など、海外での生活の様子や日本の小学校との違いなどを知る活動から子供たちの国際感覚を醸成するとともに、落語鑑賞会、相撲部屋への訪問稽古、はねつき大会、日本橋かるた大会への参加などの日本の伝統・文化に直接触れる活動を行った。

2. 取組・活動のねらい

○世界各国の人々と積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てる。
○国際理解に繋がる活動を通して、海外に対する興味・関心を高めるとともに、他者との違いを受け入れることの大切さを理解する。
○自国の伝統芸能や文化について知り、その魅力を自ら発信しようとする態度を育てる。

3. 教育課程上の教科名・時数

「総合的な学習の時間・8時間」

4. 実施上の工夫

・年間を通して、外国の文化について知る機会を設けるとともに、毎年行われている地域に根差した様々な活動や日本文化にも改めて目を向けさせ、その両方を軸として豊かな国際感覚の醸成に努める。
・講演会や交流会を行う際に、そのめあてを明確にした活動を計画する。また、その意図を児童が理解しやすいように説明し、より充実した活動につなげる。
・単発の学習で終わらせないために、学習ノートを有効活用し、自分が学んだことを蓄積させる。

5. 本取組・活動の内容

「中国の子どもたちとの交流」

・北京の小学校の3年生、4名が本校に訪れて、本校3年生と交流活動を行った。
・同学年の児童がそれぞれの言葉で挨拶をしたり、様々なゲームを一緒に行うなどの交流を通して、児童は、文化の違いに驚きながらも、中国と日本それぞれの国のよさを実感することができた。また、母国語は異なっても心は通じ合えるということについて、交流を通して体感することができた。

「落語鑑賞教室」

・本校に在籍をしていたことがある、落語家の講師をお招きし、当時の久松小学校周辺の様子をうかがったり、落語を鑑賞したりした。
・途中、児童と一緒に謎かけを考えるなど、子供も参加をしながら進めることで、その難しさや楽しさを体験した。
・日本ならではの言葉の面白さや、その魅力に多くの児童が夢中になって話を聞くことができた。

「フラメンコ鑑賞教室」

・講師としてフラメンコのダンサーをお招きし、スペインの伝統芸能であるフラメンコを鑑賞した。
・その国の文化だけでなく、スペインの小学生はどのような生活を送っているのか、日本と比べながら学ぶことができた。また、フラメンコでの手拍子のリズムを教えてもらい、特有のメロディに乗せ、体全体で曲に合わせて動きながら楽しむことができた。

6. 成果

・北京の児童との交流会では、初めに少し緊張感のあった児童が、交流会が進むにつれ表情が豊かになり、進んでコミュニケーションをとろうとしていた。言葉が伝わらなくとも、身振り手振りを交えて相手に自分の考えや気持ちを伝えようとする姿が見られた。また、キンボール選手との交流など様々な交流を通して、他国の文化を尊重しようとする心が育った。
・落語の鑑賞会や、現役力士による講演会、相撲部屋への訪問稽古、はねつき大会や日本橋かるた大会への参加など、日本の伝統・文化に直接触れる機会を多く設けた。自らが進んで参加をすることで、そのよさを実感するとともに、長きにわたって受け継がれてきた文化を誇りに思う態度の育成が図れた。
・フラメンコ鑑賞会や、コロンビア大使館との交流、JICA 国際理解教室を通して、海外での生活の様子や、日本の小学校との違いなどを知ることができた。様々な外国の文化を学ぶことで、児童が国際的な視野をもつことができるようになっただけでなく、他者との違いに気付き、それを認め合うことのよさを感じることができた。

＜実践事例　台東区立谷中小学校＞

1. 取組・活動名

「おもてなし英会話」

2. 取組・活動のねらい

○おもてなしの心をもって、友達や他者を大切にし、共に生きる人を育てる。
○日本の伝統文化を誇りとし、異文化社会に興味・関心をもち行動できる人を育てる。
○地域や自分を愛し、健康で夢に向かって努力する人間を育てる。

3. 教育課程上の教科名・時数

「総合的な学習の時間・各学年10時間程度」他

4. 実施上の工夫

・第1学年・第2学年は、英語の音声や基本的な表現に慣れ親しむことをねらいとした活動を行った。
・第3学年･第4学年は、目的や場面、状況などに応じた様々な英語の表現を知り、「聞くこと」や「話すこと」を中心にした体験的な活動を取り入れ、身近で簡単な英語の表現に慣れ親しむことをねらいとした活動を行った。
・第5学年は、「読むこと」や「書くこと」を新たに加え、相手に配慮しながら主体的にコミュニケーションを図る態度や技能の育成をねらいとした活動を行った。
・第6学年は、外国の方や文化に対する理解を深め、これまでに学んできたコミュニケーションのための技能や態度を生かし、身近で簡単な英語を使って自分の気持ちや考え方を表現する力の育成をねらいとした活動に取り組んだ。

5. 本取組・活動の内容

「デンマーク大使館・デンマークから来日した高校生との交流（全学年）」

・日本・デンマーク外交関係樹立150周年交流 推進事業と連携し、平成30年2月にデンマーク大使館を訪問して両国の文化を紹介し合うなどの交流を行った。
・デンマークから来日した修学旅行生を本校に招き、谷中小学校の学校生活を英語によるプレゼンテーションで紹介をしたり、レクリエーションを行ったりするなどの活動に取り組み、外国の方や文化に対する理解を深めることができた

「長期海外留学経験者との交流」

・早稲田大学在学中の帰国子女や日本に留学している学生が中心の「セカクル」というサークルが来校し、第5・6学年の各クラスで英語を使った交流を行った。
・各クラスに10人程の学生が入り、少人数グループでゲームをしたり歌を歌ったりするなどの、体験的な活動を通してコミュニケーションを図る基礎となる資質や能力の育成を図った。

「『おもてなし英語検定』の実施」

・「おもてなし英語検定」は10級から1級まであり、その内容は、アルファベット、曜日や月、特別教室の言い方、自己紹介や道案内などがある。
・主に休み時間などに ALT が採点者となり、成功体験を積み重ねた。検定に合格をした児童は知識や技能の定着を通して、英語に対する興味や関心を高めた。

6. 成果

・「おもてなし英会話の時間は楽しいですか」という質問（4段階評価）に対して、「楽しい」や「まあまあ楽しい」と回答した児童の割合が100%であった。英語を使ってコミュニケーションをすることに対する興味や関心を高めることができた。
・「おもてなし英語検定」を実施することで、基礎的な英語力を身に付けさせながら外国語活動の授業や、世界の人との交流などに主体的に取り組む態度を育むことができた。
・「おもてなし英会話」を進めることで、学んだ英語を使ってコミュニケーションを図る楽しさや喜びを実感する児童が増加した。自分の英語が通じることで、さらに英語を学びたいという意欲が高まった。

＜実践事例　江東区立第三大島小学校＞

1. 取組・活動名

「豊かな国際感覚の醸成・世界中みんな友達（インドネシア）」

2. 取組・活動のねらい

○外国の人々や文化を大切にする心をもち、日本人としての自覚をもって、世界の人々との親善に努めようとする態度を養う。
○我国と他国（インドネシア）の違いを乗り越え、他者を尊重し、平和を愛し、共に生きることのできる公正な社会作りに参加しようとする態度を育てる。
○日本の伝統・文化に直接触れる機会をもつことで、そのよさを実感するとともに、長きにわたり継承されてきた素晴らしい文化を誇りに思う態度を育成する。

3. 教育課程上の教科名・時数

「総合的な学習の時間・10時間」

4. 実施上の工夫

・世界の国々との交流が、児童の発達段階や実態に即した内容になるように、事前に交流内容を綿密に打ち合わせる。
・体育的行事（運動会）と関連させ表現運動で学習した「花笠音頭」を、日本文化の紹介として交流活動に入れる。
・実のある交流になるよう、インドネシアに関する興味関心のある分野について、事前に調べ学習を行わせる。
・学習を振り返る活動を行うことで、今後も世界に目を向け、多様な民族や国々の文化を理解しようとする心を育てる。

5. 本取組・活動の内容

「インドネシアについて学ぼう」

・交流会開催のあいさつのあと、インドネシア大使館の方々から、インドネシアの位置や国旗、日本からの距離、市内の様子、服装、教育、食べ物などについて、プレゼンテーションをもとにしたお話を聞いた。
・音楽文化の学習では、インドネシアの民族楽器「アンクルン」の演奏の仕方を教わり、３年生児童全員で「きらきら星」の演奏を楽しんだ。

「日本の文化を伝えよう」

・インドネシアの文化を学んだあとには、日本の伝統文化の紹介をした。グループごとに、お手玉や歌などを披露した後、運動会の表現運動で学んだ日本の民舞「花笠音頭」を全員で踊り、インドネシア大使館の人々の目を楽しませた。
・インドネシアの方々からは「大変素晴らしい踊りでした。」と、お誉めの言葉をいただいた。

「日本とインドネシアとの違いについて考えよう」

・インドネシアについて学んだことをもとに、日本の文化との違いについて、考えたことや感想をまとめた。
・子供たちからは、「日本と違うところがたくさんあったけれど、よいところがたくさんあった」、「これからももっと世界の人となかよくなりたい」など、今後も積極的に世界の人とつながろうとする意欲や世界への関心の高まりが見られた。

6. 成果

・他国と日本の文化の違いを知り、一緒に活動することを通して、互いの国のよさに気付き、互いを理解しようとする国際理解意識の素地を養うことができた。
・他国の人との交流の中で、日本の文化を紹介する取組や、会話をする活動を通して、児童が自分に自信をもち、おもてなしの心の醸成につながった。
・日本の伝統文化に触れる機会をもつことで、子供たちなりに自分の国の文化について見つめ直し、日本人としての自覚と誇りをもつことができた。
・2020 年の東京オリンピック・パラリンピック開催に向け、様々な国の人々と交流したいという意欲や関心を高めることができた。

＜実践事例　目黒区立上目黒小学校＞

1. 取組・活動名

「豊かな国際感覚の醸成を目指して」

2. 取組・活動のねらい

○外国の学校や大使館の方々との交流を通して、外国の文化に親しみ、相手の国を大切にするなどの「おもてなしの心」を育てる。
○他国の文化を学び、自国と他国との文化の違いや良さに気付かせる。

3. 教育課程上の教科名・時数

「学級活動（第1・2学年）、総合的な学習の時間（第3～6学年）・9時間」

4. 実施上の工夫

・年間3カ国と交流を行った。
・事前指導1時間、交流会1時間、事後指導1時間の計3時間で実施した。（3時間×3カ国の9時間）
・事前指導では、その国の挨拶を覚えたり、英語でのゲームを行ったり、英語の歌を歌ったりした。
・担当学年が図画工作科の時間にメダルや日本を象徴する、自然、食べ物、建物の粘土作品をプレゼントとして作成し日本のよさを伝えた。また、メダルには、交流国の言葉で一言メッセージを書き、おもてなしの心を伝えた。
・第6学年が鼓笛の演奏、第5学年が音楽会合奏曲を披露した。
・交流会終了後、お客様と児童が給食交流をした。交流国の代表的な食べ物をメニューにし、食文化を学んだり、和食メニュー時には、和食のよさを伝えたりした。
・事前・事後指導において、第5・6学年が交流した国や興味がある国に関して調べ学習を行い、新聞やプレゼンテーションソフトでまとめた。

＜国際交流会の流れ＞
①お客様入場（1分）
②英語で挨拶（1分）
③校長挨拶・お客様の紹介（3分）
④交流先によるプレゼンテーション（15分）・国の歴史、地理、文化など教えていただく
⑤英語で質問コーナー（10分）
⑥ゲーム（上目小へいこうよ）（14分）
⑦全員合唱「幸せなら手をたたこう」（3分）
※日本語と英語バージョン
⑧プレゼント贈呈（1分）
⑨お客様退場（1分）

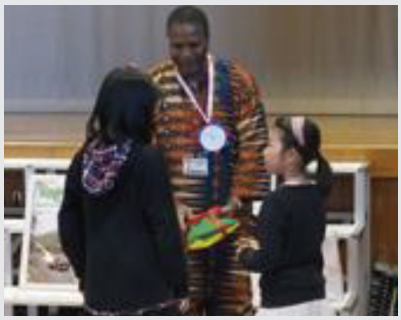
5. 本取組・活動の内容

「アメリカ合衆国」

アメリカ合衆国からの語学留学生を2名迎え、国際交流会を行った。アメリカ合衆国の文化について学んだ後、英語での歌と手作りのプレゼントを贈呈し、おもてなしの心を伝えた。歓迎会の後には、給食による会食を実施した。

「トーゴ共和国」

伝統的な衣装を身にまとい、交流会に来校した。児童のために民族衣装の試着体験や民族楽器の演奏体験を実施し、大変貴重な体験をした。お礼に、手作りのペンダント、粘土作品をプレゼントした。



「インドネシア共和国」

東京インドネシア学校の児童を招待し、一緒に遊んだり給食を食べたりした。言葉は通じなくても心が通じ合う、笑顔の絶えない時間となった。翌年、上目黒小学校を代表して、第6学年が東京インドネシア学校に招待され、伝統的な踊りや武道を披露していただくなど、温かく迎えられた。

「ミャンマー連邦共和国」

ミャンマー連邦共和国視察団の方が授業参観に来校し、児童が作った花のアーチと温かな拍手で交流国の方を出迎えた。授業後には、管理職、教職員との質疑応答を行い、日本の教育について伝えた。

※これまで交流を行った国
インドネシア共和国・トーゴ共和国・ミャンマー連邦共和国・アメリカ合衆国・アルバニア共和国・スリランカ民主社会主義共和国

6. 成果

・交流を通して相手国の方に敬意をはらいお迎えをする「おもてなしの心」が育った。
・体験を通して他国の文化について理解を深め尊重する態度が育った。
・国による文化の違いや、それぞれのよさに気付くことができた。
・他国の文化に触れることにより、自国の文化も大切にしようとする意識が高まった。

＜実践事例　羽村市立武蔵野小学校＞

1. 取組・活動名

「A: 世界の人と生きる　B: みんなと生きる（障害者理解）」

2. 取組・活動のねらい

A	「世界ともだちプロジェクト」での交流国の学校と本校が様々な手段でコミュニケーションを取ることを通して、互いを理解・尊重し合う気持ちを育む。
B	オリンピック・パラリンピック教育を通じ、障害のある人々への理解を深め、誰もが相互に人格と個性を尊重し支え合い、人々の多様な在り方を相互に認め合える共生社会を目指す児童の育成を図る。

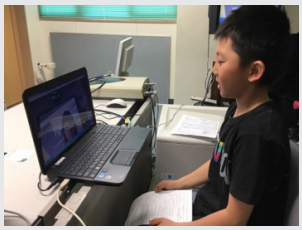
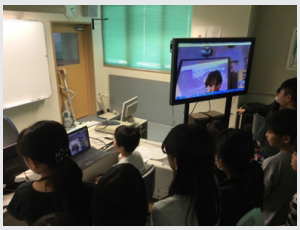
3. 教育課程上の教科名・時数

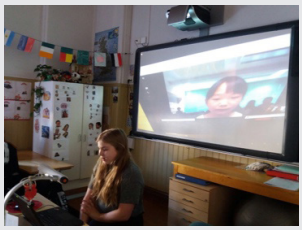
「総合的な学習の時間」
世界の人と生きる（6年生20時間）みんなと生きる（5年生20時間）
みんな地球の子供（4年生20時間）ようこそ羽村へ（3年生10時間）

4. 実施上の工夫

A	・一度だけの取組ではなく、年間を通してＥメールでのやり取りを行い、長期にわたって様々な交流ができるようにした。今回は、Ｅメール以外に外国語活動の授業「自己紹介をしよう」とも関わりをもたせ、テレビ電話での交流も行った。
B	・児童が充実した体験を行えるように、実践を取り入れるなどの指導計画を工夫した。また、児童が「楽しい」、「おもしろい」と感じることができる内容を精選し、そこから学習する内容を全職員が共通理解して取り組んだ。 ・外部講師をお招きし、「ブラインドサッカー」、「パラディスボール」、「車椅子バスケットボール」について、体験を通して学ぶ機会を設定した。 ・羽村市が主催する「羽村市東京 2020 パラリンピック 1000 日前イベント」の会場校となり、児童が多く参加できる場を設定した。

5. 本取組・活動の内容



本校での様子



相手校の様子

A「交流国とのメール交換」

・年間を通じて、本校6年生がフィンランドの小学校とＥメールでやり取りを行った。
・それぞれの学校の様子を紹介するだけでなく、互いに趣味や生活に根ざした質問をして相互理解を図った。また、外国語活動で学んだ自己紹介を、テレビ電話で実践した。
・他の学年では、1年生が育てたアサガオの種、2年生が作成した折り染めをクリスマスカードとともにルーマニアの小学校へ送った。
・アサガオを育てる様子や折り染めで遊ぶ様子がＥメールで返信され、交流のよさを実感できた。

B「情報は友だち パラディスボールを体験しよう」

・東京都教育委員会が推奨している教育支援プログラム集の中にある「パラディスボール」を教材にしたプログラムを行った。
・パラディスボールは、アイマスクをすることで、参加する全ての人が同じ条件で行うことができるゲームであり、とてもシンプルだが、実際に見るのとするのとでは感覚が異なり予想以上の難しさを体験することができた。
・「見えない」ということの体験、相手への配慮、情報を伝達することの大切さについて学びを深めた。

B「ブラインドサッカー体験」

・前半はアイマスクをして見えない状態で友達と声を頼りにグループを作ったり、見える友達に声をかけてもらったりし、まっすぐ走ったりする体験を行った。
・後半は、アイマスクをして音が鳴るボールを捜し、ゴールに向かって蹴るなど、ブラインドサッカー体験を行った。
・体験を通して、「見えない」ことの恐怖や苦労を理解することができ、周りのかけ声やサポートで、大きな安心感が得られることに気付くことができた。

6. 成果

A	・海外の小学校の様子をＥメールや写真などの交流を通して知り、生活や文化の違いについての学びを深めた。相手意識をもった考え方やコミュニケーションのとり方が、以前よりもできるようになった。 ・更にもっと英語を学びたい、また外国の方と交流したいという気持ちが高まり、外国語活動の学習に積極的に取り組む児童が増えた。
B	・パラリンピアンや外部講師との交流から、スポーツの魅力や楽しさに触れ、自らすすんで運動に親しもうとする意識を高めることができた。 ・障害や障害者スポーツについて知り、障害のある方々の考えや日々の努力への理解を深めることができた。また、障害者スポーツについて、興味、関心が高まった。 ・障害は特別なものではなく、自分たちの苦手なことと同じであるという意識を児童にもたせることができた。自分たちができるだけ障害をつくらないようにしていこうとする意識が高まった。

＜実践事例　八丈町立三原小学校＞

1. 取組・活動名

「オリ・パラの日」

2. 取組・活動のねらい

○オリンピック種目について理解を深めるとともに、実際にトップアスリートからスポーツにかける思いや選手として続けていくことの難しさなどについて話を聞くことでスポーツに対する興味・関心を高める。
○他国の文化を学ぶことで、より自国の文化の大切さに気付くことができるようにするとともに、身近にある伝統文化を学び、他国の方々に発信することで、自分の住んでいる島への愛情を育てる。
○オリンピック・パラリンピック参加国について学習する中で、様々な国の文化や言葉に触れる活動を行い、自国との違いや歴史的背景等を理解するとともに、これからの自国の在り方や自身の出来ること等、主体的に学習する力を育てる。

3. 教育課程上の教科名・時数

「総合的な学習の時間・10時間」「生活科及び学級活動・8時間」

4. 実施上の工夫

・オリンピック・パラリンピックの競技種目について調べ、パネルや冊子にしてまとめるようにし、活動内容の共通理解ができるようにした。
・地域人材を活用し、演技や演奏の指導をしていただいた。

5. 本取組・活動の内容

「スポーツ選手との交流」

・陸上競技の十種競技選手と100mハードルの選手を迎え、実技をしていただいたり、講話では、怪我を乗り越えて試合に臨んでいくことの大切さなどを話していただいたりした。

「他国との文化交流」

・ポルトガル共和国について調べたことをパネル展示するともに、実際にポルトガル共和国の大使夫人をお招きしてポルトガルの文化や自然について講演していただいた。
・ベネズエラ・ボリバル共和国の音楽を演奏していただき、他国の音楽に触れることができた。
・八丈島の伝統芸能である「ショメ節」「八丈太鼓」を披露するとともに、児童自ら演技・演奏することで、郷土の文化についてさらに理解を深めることができた。

6. 成果

・実際にトップアスリートが運動する姿をみて、競技の素晴らしさに気付くことができた。また、選手を続けていくことの難しさ、自分の夢を叶えるためには努力が大切であることを学ぶことができた。
・他国の方々に、自分の住む島の伝統文化を披露し伝えることで、一人一人が地域の一員である自覚を養い、郷土に対する愛着や誇りを育てることができた。

＜実践事例　北区立稲付中学校＞

1. 取組・活動名

「豊かな国際感覚の醸成」English Summer Camp（留学生国際交流）

2. 取組・活動のねらい

○北区立那須高原学園にて3日間、留学生と交流し、様々なゲームやアクティビティを通じて基礎的な英語力の向上を図る。
○豊かな自然環境の中で、留学生と一緒にハイキングやキャンプファイヤーなどを体験し、国際化に対応する実践的なコミュニケーション能力を高める。
○自国の文化を調べ留学生に発信することで、自国への文化の理解を深めるとともに留学生の様々な国の発表を通して多様性の理解を深める。

3. 教育課程上の教科名・時数

「学校行事・22時間」

4. 実施上の工夫

・事前学習として英語科の授業において、外国人に自己紹介ができるよう、ハンドブックに英語を記入させ、練習に取り組ませた。さらに日本の伝統的な文化や遊びを調べ、英語で留学生に伝えることで自国と他国の理解を深められるようにした。
・活動の際は日本語を使用せず英語を使用させた。宿舎には英語で書かれた多くの貼り紙を掲示し、あいさつの仕方やコミュニケーションが活発に行われるようにした。
・各グループに、違う国籍の留学生（15か国）を配置し交流の機会を増やした。2日目の夜には、それぞれの留学生から学んだ各国の文化を発表することで、多様な文化を共有することができた。

5. 本取組・活動の内容

「外国人留学生との生活」

・行きのバスから帰りまで日本語を使わず英語だけで会話することにより、自分の英語力を伸ばすことができた。
・各班に1人、キャプテンとして参加している外国人留学生と接することで、コミュニケーション能力の向上を図ることができた。

「他国の文化・歴史などついての理解」

- 1日目、2日目を通して、各班の外国人留学生から出身国について紹介してもらい、生徒自身が日本を紹介することでそれぞれの文化の違いや自国の理解につながった。
- 自分の班以外の外国人留学生とコミュニケーションをとることにより、様々な国籍の人と交流することができた。

「各グループによる発表」

- 2日目の発表の練習を1日目に行った。真剣に取り組ませるため、各教員が観察をし、その態度も評価に入れるようにした。
- 各グループの外国人留学生の母国の文化について発表をした。15グループ（15か国）の発表を全員が見て、最優秀賞を決めた。異文化に対する理解を深めたことにより、広い視野をもち、共生する態度を育成することができた。

6. 成果

- 外国語に対する関心が高まり、本校の実用技能英語検定の3級合格者が東京都の目標値を超えるなど、英語力の向上を図ることができた。
- 3日間の外国人留学生との共同生活によって英語力が向上し、日々の生活の中で積極的なコミュニケーションが多くなった。
- 異文化に触れることで、自国と他国の理解を深め、東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会で来日される外国人を「おもてなし」するために必要なことはどんなことなのかを考えることができた。

＜実践事例　狛江市立狛江第三中学校＞

1. 取組・活動名

「グローバル化社会を支える人材の育成」

2. 取組・活動のねらい

○ネイティブの方との一対一の英会話トレーニングを通して英語の会話力を向上させ、学習意欲の向上を図る
○ 2020 東京オリンピック・パラリンピックに向けて、英語を使って外国人と積極的にコミュニケーションをとる態度を養う
○日本の伝統文化等のよさを理解し、地域の情報などを積極的に発信する力を身に付ける

3. 教育課程上の教科名・時数

「英語・特別活動・3時間（1年）、6時間（2・3年）」

4. 実施上の工夫

・タブレット等のICT環境の整備（市との連携）
・外部機関との連携（英会話オンラインスピーキングのプログラムの導入）
・校内の実施体制の確立（英語科・ICT教育推進委員会・中高連携担当等の連携）
・授業（英語・特別活動）や放課後、長期休業中の時間の有効活用

5. 本取組・活動の内容

「英会話オンラインスピーキングトレーニング」

・外部機関と連携し、ICT機器を活用してインターネットのスカイプを利用したフィリピン人講師との英会話オンラインスピーキングトレーニングを全校生徒に実施した。
・英語の授業中だけでなく夏季休業中や放課後も利用して、1年生は年間1～3回、2・3年生は2～6回講師の方と1対1の30分間の英会話をすることで、積極的に話す力が身に付くとともに英語学習への意欲が高まり、学力の向上にもつながっている。

「おもてなし交流会」

・オーストラリアから高校生24名が来校し、全校生徒と「おもてなし」交流会を実施した。
・内容は、「翼をください」英語版の全校合唱や箏の演奏の披露、英語のストーリーテリングによる日本の紹介、折り鶴体験、そして本校生徒とキラウィ高校生全員によるダンス「ジェンカ」等で、生徒たちに積極的に英語で発信しようとする態度が身に付き、楽しく交流することができた。

「外国人高校生との直接交流」

[活動内容]
・2、3年生の各班にキラウィ高校生が1名ずつ入り、一緒に給食を食べて昼休みに遊んだ後、班ごとに決めたプログラムで交流を図った。
・英語学習や英会話オンラインスピーキングトレーニングの成果を発揮して、生徒たちが積極的にキラウィ高校生に話しかける場面が多く見られた。

【交流プログラム例】
書道・折り紙・ボードゲーム・カードゲーム・ダンス・ジェスチャーゲーム・バスケットボール 等

6. 成果

・生徒たちがそれぞれのレベルで英会話に自信を持てるようになり、学習意欲が高まったことで学力も向上している
・生徒一人一人の進路意識が向上し、外国を意識した目標（留学・職業等）を持つ生徒が増えた
・2020 東京オリンピック・パラリンピックに向けて、外国人への「おもてなし」の心を育むことができ、外国人と積極的なコミュニケーションをとれるようになっている
・日本の伝統文化等のよさを再認識して、外に発信することができた

＜実践事例　東京都立白鷗高等学校＞

1. 取組・活動名

「東京体験スクール」

2. 取組・活動のねらい

○STEM授業（Science, Technology, Engineering & Math）を通し、科学・テクノロジー・エンジニア・数学の合科型学習交流を行い、国を超えたチーム学習とチーム間の競い合いにより、「競争と協働」の精神を育成する
○「選手村を考える」をテーマにし、2020東京オリンピック・パラリンピックの選手村のあり方について国を超えてチームで考察・発表することにより、東京オリンピック・パラリンピック運営について学ぶ。
○「日本文化概論」の学習や学校生活体験を通し、生徒が日本の文化や風習を紹介することによって、日本の伝統・文化を再認識するとともに、ダイバーシティーを尊重する態度を育成する。

3. 教育課程上の教科名・時数

「人間と社会および通常授業時間、放課後の部活動等・延べ20日間」

4. 実施上の工夫

・STEM教育の専門家を招き、科学・テクノロジー・エンジニア・数学の合科型学習について、留学生とのSTEM学習交流とともに、教員に対する研修を実施した。
・オリンピック・パラリンピック教育団体と連携し、留学生を交えオールイングリッシュの講座を開き、選手村についての意見交換と発表活動を実施した。
・「白鷗ともだちプロジェクト」と「ホストファミリーバンク」の開設により、バディー生徒（留学生を担当する生徒）とホストファミリーの事前確保を行った。
・市民講師も含めた教職員が、オーストラリアの生徒を含めた対話的な授業計画の立案を行い、英語で行う授業やバディー生徒の通訳を取り入れた授業を計画し実行した。

5. 本取組・活動の内容

Water bucket の模型

「STEM授業交流」

・数学や理科の分野について、オーストラリアからの留学生たちによるプレゼンや、引率の先生による授業を通して、本校生徒がSTEM授業交流を行った。授業は英語で実施、本校生徒も英語を駆使して授業に参加した。
・ウォーター・バケット・チャレンジでは、水をためるバケツのタワーの模型をストローとプラスティックコップを使って作成した。
・強度と重さの計算や安定性の確保など、理科や数学の知識を統合するSTEM学習を各チーム で行い、最後に模型のコップに耐えるビー玉の数で各チームが競いあった。

「選手村を考える」

・東京オリンピック・パラリンピックにそなえ、オーストラリアからの留学生とともに選手村について話し合った。アメリカ人講師を迎え、活動はすべて英語で行い、グループ発表も英語で実施した。
・生徒たちは各国の選手がくつろげる温泉施設や、テーマパーク、ショッピングセンター、共有リビングルームなど、おもてなしを軸に様々なアイディアと日本ならではの企画を立案し、それぞれのグループで理想の選手村を計画した。

留学生と選手村を考える

理想の選手村

日本文化概論（将棋）

日本文化概論（茶道）

放課後の清掃活動

都知事表敬訪問

「日本文化概論・東京体験スクール」

・「東京体験スクール」という名の通り、留学生は白鷗で東京の高校生活を体験した。本校で学校設定科目として設置している「日本文化概論」で日本の伝統・文化についてオーストラリアの生徒とともに学ぶ機会や、オーストラリアにはない放課後の清掃活動や部活動などを体験した。
・また、ホストファミリーとなった本校担当生徒も含め、全員で都知事への表敬訪問も実施し、留学生にも本校生徒にも豊かな国際感覚を身につける貴重な機会となった。

6. 成果

・オーストラリアの高校生とホームステイを含め生活をする中で、改めて文化の違いに気づかされるとともに、日本の伝統・文化を再認識するよい機会となった。
・「選手村を考える」授業を通して、国を超えてお互いの生徒が東京オリンピック・パラリンピックで各国の選手が快適に過ごせる選手村を考え、ダイバーシティーを尊重し広く世界に関心をもつ良い機会となった。
・「日本文化概論」での学習は、日本の伝統・文化を英語で考える機会となり、留学生だけでなく本校生徒にとっても国際感覚を身につける有意義な機会となった
・参加した生徒達の声　「This program was a precious opportunity for us to use English. We were able to understand their culture and how they study. We shared “Diversity” with each other. (4年女子)」
「I have enjoyed learning about school life in Japan and have learnt how different it is from Australia - extending my knowledge and understanding of Japan’s culture and creating global awareness. (留学生)」

＜実践事例　東京都立白鷗高等学校＞

1. 取組・活動名

「トランスフォーマ・コネクション」
世界 17 カ国の日本代表校として、リオの高校とのオリンピック・パラリンピック交流活動を実施した。

2. 取組・活動のねらい

○「文化ボックス」を通し、互いの高校が自国の文化を象徴する物品を送り合うことで日本の伝統・文化を再認識するとともに、交流先のブラジルの伝統・文化に触れる。
○「スポーツが運ぶ交流」を通し、様々なオリンピック・パラリンピックの競技を体験し、競技そのものを理解するとともに、異文化理解や障害者理解を深める。
○「文化フェア」を通し、両国の文化を紹介する映像を作成・交換することにより、日本の学校生活や伝統・文化を紹介し、開催国ブラジルの伝統・文化の理解を深める。

3. 教育課程上の教科名・時数

「生徒会の生徒及び高校2年生を中心に、50名ほどの有志による教科外の活動・時間」

4. 実施上の工夫

・「生徒の自主活動」担当教員の指導の下、学校近隣の提灯専門店や東京都障害者スポーツ協会等への連絡・調整、撮影計画と映像制作の絵コンテ作成、スペイン語が堪能な保護者のへの協力依頼など、生徒が自ら企画･運営･立案･実行を行い、巨大提灯を制作した。
・「各種団体との連携」東京都教育委員会、様々なオリンピック・パラリンピック競技団体や浅草サンバカーニバル実行委員会、映像制作会社などと連携し、生徒の交流活動の活性化を図った。
・「交流活動の公開」交流活動の様子はブログの形でホームページに随時アップするとともに、東部学校経営支援センターのグッドニュースにも投稿した。
・同時期に公益財団法人東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会と東京都主催によるフラッグハンドオーバーセレモニーに向けた人文字の映像制作に貢献した。

5. 本取組・活動の内容

「巨大提灯の制作」

・本校中学生が伝統・文化体験を実施している近隣の提灯専門店と連携し、表に「白鷗」、裏側に交流校のイニシャル「EWH」の文字を描いた巨大提灯を制作した。
・生徒会執行部が地元の協力を得て集めただるまや折り紙、千代紙など日本の伝統・文化を象徴する物品を、生徒たちが作成した英語の説明を加えて一つの大き箱にしてブラジルの流校に贈呈した。

「パラスポーツ体験」

・生徒会と高校2年生が中心に、約50名の生徒でオリンピック・パラリンピックの各種団体と連絡をとり、体験場所や時間、人数などを調整して競技体験を実施した。
・体験した競技は東京都主催の「NO LIMITS SPECIAL GINZA & TOKYO」における車いすバスケットボールを皮切りに、ゴールボール、ボッチャ、パラローイング、7人制サッカー、アーチェリー、セーリング、カヌー、ボートなど様々である。
・都内各会場に足を運び、各々が体験した様子をDDにまとめ、交流校に贈呈した。

「文化交流」

・日本とブラジル両方の文化を一枚のDVDにまとめ送り合う「文化フェア」を実施した。
・生徒たちが自ら映像の絵コンテを制作し、朝からビデオカメラを抱えて日本の高校生活を映像にするとともに、これまで学んだブラジルやリオデジャネイロの文化についても映像に仕上げた。
・内容は、日本の学校紹介（授業の様子・昼休み・学校給食・放課後など）、日本文化の紹介（本校和太鼓部・長唄三味線部･百人一首部などを交えた和文化紹介）、ブラジル文化紹介（歴史･プレゼン･サンバなど）などである。

6. 成果

・生徒会生徒が中心に地元の協力を得て活動をしたことで、改めて地元の伝統･文化を知るきっかけになったとともに、交流校との交流活動で、日本では馴染みのないブラジルの文化を知り、生徒たちが他国の文化や風習を知る良いきっかけになった。
・トランスフォーマ･コネクションにより、オリンピック･パラリンピックについての理解を深めることができただけでなく、言語や文化などにも触れ、ダイバーシティーを尊重し広く世界に関心をもつ良い機会となった。
・パラリンピック競技体験をとおして、障害者の方々への理解が深まり、自分を見つめ直し他者を思いやる気持ちを持つことの大切さを再認識した。
・参加した生徒達の声
「今回、オリンピック・パラリンピックを身近に感じることができ、これを機にみんなオリンピック・パラリンピックを観てくれればいいなと思います。」
「国によって文化や風習が異なる中で、未だに内乱や紛争が存在します。今回、国を超えた共通の体験ができ、このような活動があれば、世界が仲良くなれるのではないかと思います。」

実践事例

環境

＜実践事例　大島町立つばき小学校＞

1. 取組・活動名

「海保護プロジェクト」

2. 取組・活動のねらい

○海浜教室で大島の海（自然）を知り、郷土愛の心を養う。
○塩工場、くさや工場見学を通して、海の環境を守ることが特産物（伝統食材）を守ることであることを理解する。
○海浜清掃で砂浜を綺麗にする活動を通して、生涯にわたり大島の環境を維持しようとする意識を高める。

3. 教育課程上の教科名・時数

低学年「生活科・6時間」
中学年「社会科・8時間」
高学年「総合的な学習の時間・6時間」

4. 実施上の工夫

・日常的に自然と関わることができるように、大島の児童にとって身近な海を活動の場とする。
・児童が身近な自然や社会，人々と意欲的に関わる多様な活動や体験を重視した指導を展開していく。
・6年間を通して、児童一人一人が人と自然との関わりや、社会、エネルギーとの関わり等について総合的に理解していけるように、児童の発達の段階に応じて環境教育のねらいを焦点化していく。

5. 本取組・活動の内容

「海浜教室（低学年）」

・大島北部にある海水浴場で海浜教室を行った。保護者やゲストティーチャーの協力も得て、児童は岩場での観察活動を楽しんだ。
・事前に、岩場や潮だまりでよく見かける生き物の名前や、見つけやすい場所、また、危険な海の生き物についても学習した。
・当日は、安全に留意しながら、魚やかに、貝やナマコなどを見つけ、捕まえ、観察した。
・実際に海で活動することで、海を知り、海に親しむことができた。また、自分達の身近な海にたくさんの生き物が生息していることを知り、海の豊かさを学んだ。

「塩工場・くさや工場見学（中学年）」

・塩工場の見学に行き、塩がどうやってできるか、どのように塩作りがされているかを学んだ。大島は海に囲まれており、大島でとれた海水を使って、塩を作っている。こうしてできた塩は、大島の特産物であり、全国各地へと運ばれていることを知った。
・くさや工場では、おいしさを追究する工場の方々の苦労を実感することができた。美味しいくさやには、大島近海で捕れた新鮮な魚と、受け継がれてきた秘伝の液が重要であることを見学から学んだ。
・また、その伝統的な味を試食した。農林水産総合センターでは、豊かな海を守り、魚や貝、海草などの資源を生かすために工夫している様子を学んだ。
・海を守ることが、原料となる海水やそこに暮らす生き物たちを守ることになり、特産物を守ることにつながっていることに気付き、海の環境を守ることの大切さを実感することができた。

「海浜清掃 (高学年)」

・海のゴミを拾い、海の環境を綺麗にする活動を役場の方たちと共に行った。夏に遊んでいた砂浜を何日もかけて綺麗にしてくれている人達がいたことや、その活動に参加した経験から、自分たちが生涯暮らしていく大島の環境を守ろうとする意識を養うことができた。そして、自分たちにも小さなことから出来ることがあることに気付くことができた。
・夏休みの宿題でだした日記には、きれいにした浜辺で遊んでいた時に見つけたごみを持ち帰った内容のものや、綺麗にした浜辺で観光客が楽しそうに遊んでいることへの喜びを表したものなどがあった。大島の環境を守ることが、大島の暮らしを守ることに繋がることを知るきっかけとなった。

6. 成果

・自分達の身近な海にたくさんの生き物が生息していることを知り、海の豊かさを学んだ。
・綺麗な環境の中では、様々な生き物が生きられることを学んだ。
・普段生活の中で使っている塩や特産物について学ぶことで、海の環境を守ることが大島の特産物（伝統食材）を守ることにつながっていることに気付くことができた。
・綺麗になった海浜を見て、小さなことでも自分たちに出来ることがあることに気付くことができた。
・実際に海で活動することで、海を知り、海に親しむことができた。

＜実践事例　江戸川区立小岩第三中学校＞

1. 取組・活動名

「三中の環境プロジェクト」

2. 取組・活動のねらい

○燃料電池を生徒一人ひとりが制作することを通して、地球温暖化防止に貢献するエネルギーを学ぶ。
○身近な江戸川周辺の生き物と触れ合い、また、その一部をビオトープで飼育することで自然環境を考えるきっかけにする。
○屋上を緑化し、ヒートアイランド問題を考える。また、屋上で野菜を育てることを通して、「地産地消」の考え方を学ばせる。

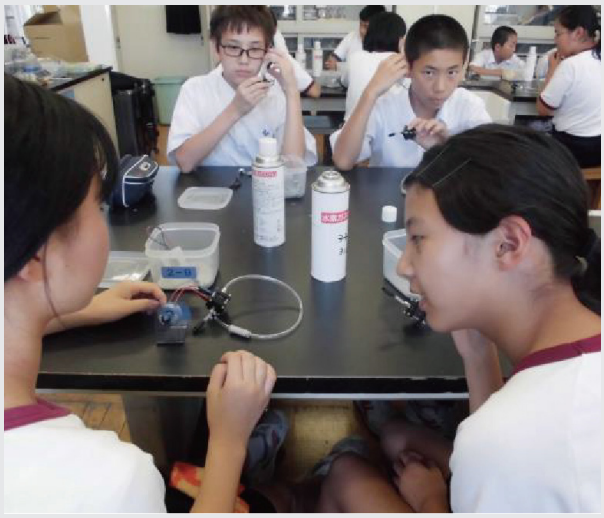
3. 教育課程上の教科名・時数

「理科・1時間」、「生物環境部の活動」

4. 実施上の工夫

・水の電気分解をまだ習っていない中学1年生には、燃料電池の仕組みを教えるのは、難しいので、「燃料電池」の出前授業の前に、特別に化学反応の授業を実施した。
・毎年、江戸川や千葉県の三番瀬、市川市の大町自然公園などで自然観察会を行っている。生徒にとっては、単に自然観察よりも、実際に生物を捕まえて観察することに興味が強いので、捕獲が可能な場所では、生物を採取して観察したのち、再び逃がしている。
・屋上の緑化してある場所とそうでない場所の温度を測定し、データーとして体感する。

5. 本取組・活動の内容



「ガス会社による出前授業『燃料電池』」

・民間ガス主催の出前授業 を 1 学年 191 名が受講した。
・風力発電、太陽電池などを実際に見たり、使用したりして学んだ後に、生徒一人一人が燃料電池キットを用い、「水素と酸素から電気を作ることができる。」ことを体験した。
・写真は、水素ガスを燃料電池に挿入し、プロペラを回しているところ。男子生徒は電気オルゴールを聞いている。

「自然観察会」

・江戸川の菖蒲園で生き物調査を毎年、実施している。メダカ、トウキョウダルマガエル、アマガエル、ドジョウ、タニシ、ゲンゴロウ ホウネンエビ、アメリカザリガニなどの個体数を記録して、また元の場所にもどしている。
・今年度は、メダカに混じって、ヒメダカやシロメダカが 40 個体以上採取できたので、生態系を守るために、希望する生徒に持ち帰らせた。
・写真は、屋上のビオトープに採取したメダカを5匹放しているところである。

「屋上緑化」

・屋上を緑化し、野菜を育てている。写真はサツマイモ畑の雑草を取っている様子。
・野菜は、クウシンサイ、モロヘイヤ、ミニトマト、サトイモ、ジャガイモ、ニンニク、ピーマン、サニーレタス、サンチュ、ナスなどを育て、「地産地消」を実践している。
・今年度は、芝生と野菜畑、緑化していない部分での温度も測定した。7月14日現在、芝生で42℃、野菜畑で35℃、緑化していない場所で53℃であった。

6. 成果

・「燃料電池」という言葉さえ知らない多くの生徒たちが、水素ガスを燃料電池に入れることでエネルギーを作ることができ驚いていた。大気を汚さないエネルギーを作る手法を実感し、地球温暖化防止に貢献するエネルギーを身近に感じることができた。
・学校のそばを流れる江戸川にたくさんの生き物が生息していることを確認し、生息するためには、流れの緩やかな場所など多様性に富んだ環境が必要なことを学んだ。また、人為的に増えてしまった生物（ヒメダカ、シロメダカ）を生息地から取り除くことによって、自然環境を守っていくことも活動を通して学んだ。
・江戸川菖蒲園で採集したメダカ5匹は、屋上に作ったビオトープに放し、現在繁殖し数を増やしている。野生で、少なくなったメダカを、いずれは元の場所にもどし、自然保護につなげていく。また、ビオトープでは、自然にトンボが卵を産み、ヤゴが羽化した。身近な自然の営みをビオトープで再現できることは意味が大きい。
・屋上菜園では、「地産地消」の概念のもと、野菜をたくさん育て、自宅に持ち帰らせているが、学校でも、取れた野菜を利用してエコクッキングとしてカレーをつくり、毎日の台所でどうすれば環境に優しいかを考えるきっかけになっている。
・緑化がヒートアイランド現象を防ぐことを、実際に温度を測定することで明確に理解することができた。
・これらの取り組みは、生物環境部でおこなわれているが、学芸発表会に結果を展示し、生徒全体へも呼びかけている。

＜実践事例　東京都立つばさ総合高等学校＞

1. 取組・活動名

「高校生環境サミット」の開催

2. 取組・活動のねらい

○国際的に課題となっている環境保全への取組をテーマに有識者を招き、環境問題について理解を深めるとともに、様々な学校・大学・東京都環境局・NPO 法人等と交流や情報交換を行うことで、自然を大切にし、環境の保全に寄与する態度を養う。
○生徒自身が企画・準備・運営することで、自主・自律・自治の精神を育成する。

3. 教育課程上の教科名・時数

「特別活動・5時間」他

4. 実施上の工夫

・校務組織として本校の環境教育・環境活動に取り組む「ISO推進委員会」に、教職員・生徒・保護者が一体となって活動を進めている。
・環境マネジメントシステム「ISO14001」の認証を取得し、成果や取組内容の改善等についてPDCAサイクルを生徒とともに実施している。
・「今月の目標」を毎月定め、登校時の宣伝活動や広報紙の発行を通じて環境問題に関する普及啓発活動に自主的・主体的に取り組むことにより環境保全への意識を高めている。

5. 本取組・活動の内容

「基調講演」

・テーマに関連した有識者により1時間程度の基調講演を毎年実施している。
・昨年は「海と環境」がテーマで、WWFジャパンの専門家をお招きして、「持続可能な環境保全への取組」に関する講演をしていただいた。

「パネル展示」

・昨年は8つの高校をはじめとする22の団体が、それぞれの取り組みに基づく展示・実演・体験企画を実施した。
・本校の生徒もエコクッキングや廃油キャンドル製作の体験企画を実施した他、ISO委員会の生徒が「カーボンオフセット」の活動について展示し、来場者に紹介した。

「高校生の実践発表」

・希望した参加高校の生徒が環境に関する実践・研究のプレゼンテーションを実施している。
・昨年は本校を含む3校が舞台に立ち、自然環境の保護、フードロス削減、リサイクル活動の成果と課題といった発表を行った。

6. 成果

・毎年実施している基調講演等を通して、本校の生徒はもとより外部の参加者からも、「環境問題について日本や世界で今起きていることが分かってよかった」「もっと環境問題について意識を持たないといけないと思った」など、環境問題について理解を深めたり、課題を共有できたりすることができた。
・調べ学習やポスターセッション等を通して、課題解決能力やプレゼンテーション能力、コミュニケーション能力を高めることができた。
・年度当初から、生徒が環境サミットのテーマや基調講演の講師、その他の企画内容について検討し、環境サミットの企画・運営も自主的・主体的に行うことで、自主・自律・自治力を養うことができた。